HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アイスランド語の音韻とカナ表記の問題点（一）
Author(s)	清水, 誠
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 132, 1（左）-44(左)
Issue Date	2010-11-15
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/44299
Type	bulletin (article)
File Information	ARCS132_005.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学研究科紀要 132 (2010)

アイスランド語の音韻とカナ表記の問題点 (1)

清 水 誠

Íslensk hljóðfræði með tilliti til japanskrar hljóðritunar (1)
(*The Annual Report on Cultural Science* No. 132. Graduate School of Letters, Hokkaido University. Sapporo/Japan. 2010. ISSN1346-0277)

SHIMIZU, Makoto
(mshimizu@lit.let.hokudai.ac.jp)

0．はじめに

外国語の語彙を日本語でどのようにカナ表記するべきかという問題は，便宜的方策ではあるが，避けては通れない壁である。アイスランド語のように受容の歴史が浅く，カナ表記に合意がない外国語についてひとつの指針を示し，そこからアイスランド語音韻記述の問題点を探るのが本稿の目的である。拙著(2009e)および参考文献に挙げたその他の拙稿では，具体例を実践した。本稿はその後の修正を含めて体系的に論じようとするものである。カナ表記の先駆的考察にはアイスランド人の手による Magnús P.(1981)，組織的な実践例には浅井/森田 (1980) がある。しかし，両者とも本稿とは異なる点が少なくない。引用した地名は山，河川，島，湖などを含み，Örn S. et al.(2000) と浅井/森田 (1980) を参照した。人名の選定には Guðrún K./Sigurður J. (1991) を参考にした。

類型論的性格が著しく異なる日本語の表記に置き換える作業は，正書法では区別されない子音連続での変化，母音の長短，音節構造などアイスランド語音韻論の問題点を掘り起こす契機になる。本稿は従来のアイスランド語カ

ナ表記の不備を補い，日本語話者の立場から従来のアイスランド語音韻記述の問題点を指摘し，説明を試みる。今回は全体的な問題点を扱い，個々の音のカナ表記については稿を改めて次回に論じたい。なお，本研究には科研費（21520425）の交付を受けた。

1．「カナ表記」と「カナ発音」

外国語の音韻表記にはIPA（国際音声字母）という方法がある。しかし，他言語への正書法による転写には確固たる原則がない。音韻体系が同一の複数の言語が存在しない以上，これは妥協の産物になる。一方，外国語の学習辞書などに見られる「カナ発音」は，「カナ表記」とは別の概念である。「カナ発音」は外国語の音韻体系を反映させたもので，日本語として自然である必要はなく，補助記号を交えることも少なくない。それにたいして，「カナ表記」は日本語として無理があってはならない。さらに，両者には大きな違いがある。辞書の「カナ発音」にはコンセンサスがあるわけではなく，英和，独和，仏和の対訳辞書では辞書ごとに微妙に異なっている。それは語義や用例と同じく，各々の辞書の特色とみなされている。一方，「カナ表記」には規範的統一性が求められる。alcohol［ˈælkəhɔ(:)l］「アルコール」という英単語に［**アル**カホ(ー)ル］という「カナ発音」を与えることには意味があるが，「カナ表記」としては「アルカホ(ー)ル」では問題がある。「カナ表記」は日本語の標準的語形として，辞書登録されるべきものだからである。辞書登録されるのは「外来語」と認められた語に限られ，大部分の固有名詞や専門用語は含まれない。本稿で対象とするのは，すでに定着したものを除くこうした語彙である。したがって，Ísland［i:slanḍ］，saga［sa:ɣa］，skáld［sg̊aulḍ］に［イースランド］[1]，［サーガ］，［スカウルド］という「カナ発音」を与えても，「カナ表記」を「アイスランド」，「サガ」，「スカルド（詩人）」とすることに異議を唱える強い理由はない。なお，ある語を定着したとみなす基準に

[1] ［イスランド，イーストランド］（［islanḍ, i:sd̥lanḍ］）もあり得る。注62参照。

は立ち入らない。

2．現代語の発音と古語の推定音

ここで，現代語の発音と古語の推定音のどちらを取るかという問題に触れておこう。アイスランド語史の区分としては，「古期アイスランド語」(fornískenska　874〜1350)，「中期アイスランド語」(miðíslenska　1350〜1540)，「新期アイスランド語」(nýíslenska 1540〜)の 3 区分が一般的といえる[2]。中期アイスランド語の時代には「音量転換」(6.1．参照) など一連の重要な音韻変化が起こったが，新期アイスランド語の時代以降は著しい変化は起きておらず，現代語の骨格が定まったとされている。したがって，14 世紀末半ばが古語から現代語への移行期にあたり，16 世紀半ば以降は明確に現代語表記の範囲に属するといえよう。中世文学の受容から始まった日本のアイスランド研究一般では，古語の推定音によるカナ表記に終始してきた。一方，近代以降については現代語の発音に従うのが当然だが，このことは不問に付されていた観がある。本稿で論じるのはこの点である。

中世文献の人名や作品名を古語の推定音で転写することには，それなりに根拠がある。しかし，それを現代語の発音で読み，表記する方法もけっして否定されるべきではない。私たち日本人は専門家が国文学を講じる場合でさえ，『万葉集』や『源氏物語』などの古典文学作品を古語の推定音で読んではいない[3]。他のヨーロッパの言語と違って古語と現代語の相違がわずかで，中

---

[2] この区分には類書によって異同がある。1540 年を新期アイスランド語の始まりとするのは，デンマークのロスキレ (Roskilde) でオッドゥル・ゴホトスカウルクソン (Oddur Gottskálksson 1515 頃〜56) による新約聖書のアイスランド語訳がアイスランド語による初の印刷本として刊行されたことによる。一方，宗教改革断行の 1550 年，あるいは 1530 年，1600 年を区切りとする意見もある。

[3] 中世ドイツ文学の受容でも，*Der arme Heinrich*『哀れなハインリヒ』，Walther von der Vogelweide「ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデ」のように，作品名や人名は一般に現代語の発音で表記する。ただし，中世ドイツ語のテキストを現代ドイツ語の発音で読むのは困難であり，古語の推定音を交えて読むことが多い。

世文学の遺産を自らの血肉としているアイスランド人にとって，このことはいっそう自明である。アイスランド人はサガや『エッダ』（*Edda*）を現代語の発音で読むのであり，古語の推定音で読むのは本国以外の学習者や研究者に限られている。Morita（1976），森田（1981：i–ii）はこの点を強調し，外国人も現代語の発音で読むべきであるとして，『アイスランド語語源辞典』（*Isländisches etymologisches Wörterbuch* 1956）の著者でアイスランド大学学長を歴任したアーレヘサンデル・ヨウハネソン（Alexander Jóhanesson 1888〜1965）がベルリン大学でグスタフ・ネケル（Gustav Neckel 1878〜1940）の『エッダ』の講義に出席したときに，古語の発音でテキストを読むのを聞いて遺憾に堪えなかったという逸話を紹介している。

これにたいして，アイスランド人以外の立場からは異議がないわけではない。ドイツにおける現代アイスランド語研究の権威だったブルーノ・クレス（Bruno Kress 1907〜97）は，現代アイスランド語の音韻にかんする著書（Kreß (＝Kress) 1937: III–V）の序文で，学生時代に上記のネケルの『エッダ』の演習で初めてアイスランド人が現代語の発音でテキストを読むのに接して，まったく理解できなかったと回想している。そして，これはアイスランド人には自然だが，外国人が強要される理由はなく，諸外国の研究者の相互理解に支障をきたし，古語をないがしろにする行為であるとさえ述べて，古語の音韻の理解に至るには現代語の考察が最も確実な方法であるとしている。Morita（1976：46）も，ノルウェー人は古ノルウェー語（Old Norwegian）のテキストを現代アイスランド語の発音で読むべきだとは述べておらず，個人的な好みに任せればよいとしている。つまり，これは中世のアイスランドだけを興味の対象とし，近現代を軽視しがちな海外の研究者への戒めといえよう。アイスランド人にとって，こうした態度が自国の文化にたいする偏見と映ることは容易に想像できる。私たちは現代アイスランド語の理解の上に立って，古語に取り組む姿勢を大切にするべきだろう。

3．原語としてのアイスランド語重視の原則

以前には，アイスランド語の語形を無視して語尾などを省略し，英語などの語形から転写する習慣があった。Ólafur［ou:lavʏr］「オウラヴル」を「オーラヴ」（Olaf），Sigurður［sɪ:ɣʏrðʏr］「シーグルズル」を「シグルド」（Sigurd）とするのがその例である。これは翻訳文献を頼りした時代のなごりだが，明らかに不適切である。キリスト教文化圏のヨーロッパでは，人名は聖書の登場人物や聖者の名前を基礎として言語ごとに対応名があり，母語の語形に置き換えることは珍しくない。しかし，非ヨーロッパ圏の日本にはそのような慣習はない。Homēros「ホメーロス」や Vergilius「ウェルギリウス」を「ホウマー」（Homer）や「ヴァージル」（Virgil）と紹介している文学書がどこにあるだろうか。

一方，近現代の人名を「オーラヴル」，「シグルズル」とするのは，「音量転換」と「音節均衡」（6.1.参照）の原則に反した誤記である。goði「首長」，Vínland「北米大陸」を現代語の発音で表記すれば，「ゴジ」，「ヴィーンランド」ではなく，単一語と複合語での母音の長短の相違（6.8.参照）を考慮して，「ゴージ」（［ɡ̊ɔ:ðɪ］），「ヴィンランド」（［vinlan̥d］）とする必要がある。Jónsdóttir［jounsd̥ouhd̥ɪr］「ヨウンスドウフティル」という女性の「父称」を「ヨーンスドッティル」とするのは，これに加えて前気有気音 tt［hd̥］を Oddi［ɔd̥:ɪ］「オッディ」（地名）のような無気閉鎖音の長子音 dd［d̥:］から区別しない不適切な表記といえる。本稿では，原語のアイスランド語の語形と発音を尊重したカナ表記を目指す。

4．アイスランド語の音韻と正書法

4.1. 標準発音の模索と音韻研究の歴史

アイスランド語の研究史については拙稿 (2008)，(2009a) で言及した。音韻の研究は数多いが，標準発音について最も重要な提言を行ったのは，ビェ

ルトン・グヴズフィンソン（Björn Guðfinnsson 1905〜50）である。アイスランド語には明確な方言区分は存在しないが，音韻には地域的特徴が認められる[4]。ビェルトンは 1930 年の「国立ラジオ放送局」（Ríkisútvarpið）の開設を背景に助成金を得て，1941〜44 年に全国各地で約 1 万人を調査し，学校教育への導入を意図して 10〜13 歳の児童 6,520 人のデータを分析し，1947 年に標準発音を定め，実践した[5]。しかし，当時，増えつつあった前舌長母音の半狭音と半広音［ɪ:］≠［ɛ:］，［ʏ:］≠［œ:］を区別しない「弛緩発音」（flámæli, hljóðvilla）を排除し，「硬音発音」（harðmæli）と呼ばれる母音間（語中で長母音の後）の有気閉鎖音 p［pʰ］/t［tʰ］/k［kʰ］/［cʰ］など，北部を中心に各地の地域的特徴を集積したために，どこにも存在しない人工的な性格が強く，ビェルトンの早世もあって普及しなかった。一般に標準発音は中心的使用地域に立脚する例が多い。レイキャヴィーク首都圏を中心とする南西部では，「軟音発音」（linmæli）と呼ばれる母音間で「気音」が弱まった無気閉鎖音 p［b̥］/t［d̥］/k［g̊］/［ʝ̊］が現れる[6]。たとえば，Björg［b̥jœrg̊］「ビェルグ」（女名，björg「救助」）と Björk［b̥jœr̥g̊］「ビェルク」（女名，björk「白樺」）は，有声［r］と無声［r̥］で区別する。本稿では k「ク」，g「グ」として区別

[4] 音韻の地域的特徴は Sigurður J. et al.（1992²），Indriði G./Höskuldur Þ.（2000²）参照。

[5] おもな業績には *Mállýzkur I* (1946) Reykjavík. Ísafold.（筆者未見）や没後に編まれた Björn G.（1964）などがある。成人にも調査を行ったが，成果としてまとめる前に惜しくも早世した。Svavar S.（2005：1832），Guðrún K.（2005：1742–44），Höskuldur Þ./Kristján Á.（1992），Magnús P.（1988： 8 f.）参照。

[6]「硬音発音」は北部のスカーガフィエルズル（Skagafjörður）からヴォホプナフィエルズル（Vopnafjörður）まで，「軟音発音」は南部を中心にベールフィエルズル（Berufjörður）からフルータフィエルズル（Hrútafjörður）まで，残りの地域は両者の混合。「弛緩発音」はレイキャヴィーク首都圏を中心とする南西部，東部，北西部のフーナヴァスシスラ（Húnavatnssýsla）。Magnús P.（1978：71 f.）の方言地図参照。北米大陸に移住したアイスランド人の発音にも見られる。Svavar S.（2005：1832），Stefán E.（1949²：11）参照。なお，「弛緩発音」は学校教育や社会的言語規範意識によって矯正され，現在ではほとんど消滅したとされている。Höskuldur Þ./Kristján Á.（1992：105，112）参照。

する[7]。

この提言はステーファウン・エイナルソン（Stefán Einarsson 1897〜1972）の有名な学習書（Stefán E. 1949[2]（1945））の充実した語彙集に採用された。その発音表記はビェルトンが校閲しており，ステーファウンの出身地である東部の発音を優先的に示している[8]。当該の説明箇所を引用しよう（ib. viii，一部修正）。

1．母音間の有気閉鎖音 p［pʰ］/t［tʰ］/k［kʰ］/［cʰ］（北部・東部）↔母音間の無気閉鎖音 p［b̥］/t［d̥］/k［g̊］/［ɟ̊］（南部・西部，レイキャヴィーク）
2．有声の｛l［l̥］/m［m̥］/n［n̥］｝+｛p/t/k｝（北部・東部）↔無声の｛l［l̥］/m［m̥］/n［n̥］｝+｛p/t/k｝（南部・西部，レイキャヴィーク）
3．hv［hw̥］（南部・東部）↔ kv［kʰv］（北部・西部，レイキャヴィーク）
4．fð［vð］/gð［ɣð］（南部・東部，レイキャヴィーク）↔ fð［b̥ð］/gð［g̊ð］（北部）
5．agi［ai:jɪ］/egi［ei:jɪ］（北部・西部，レイキャヴィーク）↔ agi［a:jɪ］/egi［ɛ:jɪ］（南部・東部）

同書の語彙集では左欄の東部の発音を最初に挙げているが，レイキャヴィーク首都圏を中心とする南西部の発音を次に添えている。В. П. ビェルコフ/アウルトニ・ベズヴァルソン（Árni Böðvarsson 1924〜92）のアイスランド語・ロシア語辞典（Берков/Аурни Б. 1962）も基本的にビェルトンの方式に従っている。一方，後述するヨウン・オウフェイフソン（Jón Ófeigsson

[7] ただし，近年では，語末音の閉鎖音は有気音になることがある。例. band［b̥and̥］→［b̥antʰ］「リボン」；Kristján Á.（2005：1565）参照。「硬音発音」は学校教育で重視され，レイキャヴィーク首都圏でも完全に衰退したわけではない。Svavar S.（2005：1833）参照。

[8] 南ムーラシスラ（Suður-Múlasýsla），ブレイズダールル（Breiðdalur）のヘスクルツスタージル（Höskuldsstaðir）がステーファウンの出身地である。

1881〜1938）が発音解説・表記を担当したシフフス・ブレンダル（Sigfús Blöndal 1874〜1950）のアイスランド語•デンマーク語辞典（Sigfús B. 1920–24）は，レイキャヴィーク首都圏を中心とする南西部の発音を最初に示し，同方言の発音を初めて取り入れた辞典である。このほかに，同辞典（ib. XXV）とステーファウンの学習書（ib. 20）は変化語尾 -ar/-ir/-ur の r［ɾ̥］を無声音とし，Stefán E.（1949²：24），Sigfús B.（1920–24：XVIII），Берков/Аурни Б.（1962：947 ff.）の 3 者は一般に語末の有声音を「半有声音」としている[9]。ただし，本稿では半有声音は認めず，近年の代表的な類書の記述を考慮して，ともに有声音とする。

発音記号つきの代表的な辞書・語彙集は以上の 3 種類である。しかし，本格的な発音辞典は存在しない。それは方言差が比較的少なく，意志疎通の問題がない現状を考慮して，1985 年設立の委員会が標準発音の規範を制定せず，地域的特徴を維持する方針を固めたことによる。ビェルトンの調査の 40 年後にあたる 1980 年代には，当時の調査対象者を含めて再び大規模な「現代アイスランド語調査」（Rannsókn á íslensku nútímamáli）が行われた。Höskuldur Þ./Kristján Á.（1992）はその間の変化を跡づけ，地域的音韻特徴を再確認した報告である。Indriði G./Höskuldur Þ.（2000²（1993））はその調査データに基づいて地域的・社会的特徴を詳述した有益な手引きだが，標準発音については何も定めていない。アイスランド語の言語政策は外来語など，他言語からの干渉は厳しく排除し，正書法や語形変化には厳格な規範性を要求するが，発音の地域的・社会的変異には寛容である。一般のアイスランド語話者も母語の地域的特徴にたいしては鷹揚（おう）である。アイスランド語の音韻記述とカナ表記は，以上の事情を考慮して行う必要がある。

本稿の記述対象は，話者の約 3 分の 2 が居住するレイキャヴィーク首都圏

[9] Svein (＝Sveinn) B.（1967：XVII）は，Sveinn B.（1941）に基づいて，語末の r［ɾ̥］を無声音としている。近年では，摩擦音と l/r は語末で無声化することがある。例．hár［hau:r］→［hau:ɾ̥］「髪」，blað［blaːð］→［blaːθ］「新聞，紙」；Kristján Á.（2005：1565）参照。

を中心とした南西部主要方言である。Höskuldur Þ./Kristján Á.（1992：98–106）によれば，この地域の音韻的特徴には 1940 年代以降，一連の革新が認められる。本稿でもこの特徴を重視するので，以下に列挙しておこう[10]。

1．母音間では有気閉鎖音 p［pʰ］/t［tʰ］/k［kʰ］/［cʰ］（硬音発音）ではなく，無気閉鎖音 p［p̥］/t［t̥］/k［k̥］/［ɟ̊］が現れる（軟音発音）。
api［a:p̥ɪ］「猿」（↔［a:pʰɪ］）　loka［lɔ:k̥a］「閉じる」（↔［lɔ:kʰa］）

2．p/t/k の直前の l［l］/m［m］/n［n］/ð［ð］は無声化 l［l̥］/m［m̥］/n［n̥］/ð［θ］し，p/t/k は無気閉鎖音になる。
stúlka［st̥ul̥k̥a］「女の子」（↔［st̥ulkʰa］）

3．語頭の hv- は［xv］ではなく，［kʰv］と発音する。
hvalur［kʰva:lʏr］「鯨」（↔［xva:lʏr］）

4．-gi［jɪ］の直前の長母音 a［a:］/e［ɛ:］/o［ɔ:］/ö［œ:］/u［ʏ:］/i,y［ɪ:］は a［ai:］/e［ei:］/o［ɔi:］/ö［œy:］/u［ʏi:］あるいは i, y［i:］になる。
bogi［p̥ɔi:jɪ］（または［p̥ɔj:ɪ］）「弓」（↔［p̥ɔ:jɪ］）

5．ng［ŋ̊g］/［ɲ̊ɟ］，nk［ŋ̊g］/［ɲ̊ɟ］の直前の母音 a［a］/e［ɛ］/ö［œ］/u［ʏ］/i，y［ɪ］は a［au］/e［ei］/ö［œy］あるいは u［u］/i，y［i］になる。
drengur［t̥reiŋ̊gʏr］「男の子」（↔［t̥rɛŋ̊gʏr］）

6．rn/rl は中間に［t̥］を挿入して rn［rt̥n］/［rt̥n̥］，rl［rt̥l］/［rt̥l̥］となる。
Árni［aurt̥nɪ］「アウルトニ」（男名）（↔［aurnɪ, aut̥nɪ］）
Sturla［st̥ʏrt̥la］「ストゥルトラ」（男名）（↔［st̥ʏrla, st̥ʏt̥la］）

7．前舌長母音では半狭音と半広音（［ɪ:］≠［ʏ:］，［ɛ:］≠［œ:］）を区別する（「弛緩発音」を排除）。
bið［p̥ɪ:ð］「待機」≠beð［p̥ɛ:ð］「苗床」（bið～beð［p̥ɪ:ð］～［p̥ɛ:ð］）
stuð［st̥ʏ:ð］「衝撃」≠stöð［st̥œ:ð］「駅，局」（stuð～stöð［st̥ʏ:ð］～

[10] Guðrún K.（2005：1743 f.）にも簡明な要約がある。

［sd̥œ:ð］）

8．ð［ð］の直前の摩擦音 f［v］/g［ɣ］は閉鎖音 f［b̥］/g［g̊］にならない。
hafði［havði］「持っていた」（hafa［ha:va］の過去形）（↔［hab̥ði］）
sagði［saɣði］「言った」（segja［sei:ja］の過去形）（↔［sag̊ði］）

9．ngl［ŋg̊l］/［ŋg̊l̥］の［g̊］は脱落して［ŋl］/［ŋl̥］となる[11]。
England［eiŋland̥］「イギリス」

4.2. アイスランド語の音韻概観

以上の前提に立った上で，アイスランド語の音韻を概観しておこう[12]。母音と子音の長短は 6.1. で述べるように弁別的ではないが[13]，音声学的な長短とおよその目安としてのつづりを添えておく[14]。あいまい母音［ə］（schwa）は存在しない。文字にはこのほかに é と x がある。z の文字は ds/ts/ðs の代わりに 1929 年の正書法改正で導入されたが，1973/74 年の改正で s を当てることで廃止され（例．íslenska「アイスランド語」← íslenzka ← íslendska），Zoëga「ソエガ」[15]，Haralz「ハーラルス」のような少数の人名の姓などに限られる。なお，「語頭(音)」（ド Anlaut），「語末(音)」（ド Auslaut），「語中(音)」（ド Inlaut），「母音間」は単一語，それに複合語と一部の派生語の構成

---

[11] -ngt［ŋd̥］も［ŋg̊d̥］とは発音しない。-ngn［ŋn］/-ngs［ŋs］でも［g̊］が脱落する傾向がある。Indriði G./Höskuldur Þ.（2000²：215）参照。

[12] アクセント記号は省略。文中で強調アクセントを持つ語の語頭母音の前には，声門閉鎖音［ʔ］が現れる。Kristján Á.（2005：1562）は［ʔ］を音素とみなしている。近年では，Ragnar［rag̊nar］→［raʔnar］「ラグナル」（男名）のように n の前の口腔閉鎖音の代わりに［ʔ］が現れることがある。Svavar S.（2005：1833），Höskuldur Þ./Kristján Á.（1992：100–102）参照。

[13] Pétur H.（1993：26 f.），Stefán E.（1949²：11）は ug(i)［ʏi］，og(i)［ɔi］も二重母音に加えているが，これは「{u/o}＋-gi」の連続で現れる異音であり，二重母音とは認められない。

[14] m/n は mm/nn と重ねずに長子音［m:］/［n:］を表すことがある（例．fram［fram:］「前へ」，en［ɛn:］「しかし」）。長子音字 mm/nn も長子音を表すとは限らない。4.3. 参照。

[15] トレマ（分音符）をつけた ë の文字も，現在の正書法ではこれ以外に用いない。

要素での区別を指す[16]。

① 母音

	前舌（硬口蓋）		後舌（軟口蓋）	
	非円唇	円唇	非円唇	円唇
狭	í/ý[i(:)]			ú[u(:)]
半狭	i/y[ɪ(:)]	u[ʏ(:)]		
(半)広	e[ɛ(:)]	ö[œ(:)]	a[a(:)]	o[ɔ(:)]
二重母音	ei/ey[ei(:)]	au[œy(:)]	æ[ai(:)] á[au(:)]	ó[ou(:)]

② 子音

		両唇	唇歯	歯・歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖音	有気	p[pʰ]		t[tʰ]	k[cʰ]	k[kʰ]	
	無気	b(b)[b̥(:)]		d(d)[d̥(:)]	g(g)[ɟ̊(:)]	g(g)[g̊(:)]	
		p[b̥]		t[d̥]	k[ɟ̊]	k[g̊]	
摩擦音	有声		v/f[v]	ð[ð]	j/g[j]	g[ɣ]	
	無声		f(f)[f(:)]	þ/ð[θ] s(s)[s(:)]	h(j)[ç]	g/k[x]	h[h]
鼻音	有声	m(m)[m(:)]		n(n)[n(:)]	n[ɲ]	n[ŋ]	
	無声	m[m̥]		(h)n[n̥]	n[ɲ̊]	n[ŋ̊]	
側音	有声			l(l)[l(:)]			
	無声			(h)l[l̥]			
ふるえ音	有声			r(r)[r(:)]			
	無声			(h)r[r̥]			

4.3. アイスランド語正書法の特徴

アイスランド語の正書法は語形変化と語形成の整合性を優先しており，文

[16] [:] は長音，[̥] は無声化，[b̥]/[d̥]/[ɟ̊]/[g̊] は無気閉鎖音，[pʰ]/[tʰ]/[cʰ]/[kʰ] は有気閉鎖音（IPA 表記 [b̥ʰ]/[d̥ʰ]/[ɟ̊ʰ]/[g̊ʰ]）を示す。Indriði G./Höskuldur Þ.（2000²：32）参照。

字と発音の乖離はかなり大きい。長短の相違や種々の変化に左右されず，つねに同一の音を表す文字は x［xs］しかない[17]。たとえば，allur［aˌdlʏr］「すべての」とその変化形 öll［œˌdˌl］，alls［als］，allt［aˌlˌd］の ll は［ˌdl］，［ˌdˌl］，［l］，［ˌl］という 4 種類の音に分かれ，segja［sei:ja］「言う」── sagði［saɣðɪ］（過去形）── sagt［saxˌd］（過去分詞）の語中および語末の g は［i］，［ɣ］，［x］という 3 種類の音を表す。母音間（gi-を除く）の g は一般に有声軟口蓋摩擦音［ɣ］だが，Ágúst［au:ˌgʏsˌd］「アウグスト」（男名，ágúst「 8 月」）では例外的に閉鎖音［ˌg］が現れる。hesturinn［hɛsˌdʏrɪn］「その馬」と bókin［bˌou:ˌɪn］「その本」の定冠詞 -inn（男性単数主格）/-in（女性単数主格）は文法性（kyn, gender）の明示手段であり，kennsla［cʰɛnsla］「授業」，þensla［θɛnsla］「拡張」，reynsla［reinsla］「経験」の nn/n［n］の表記は，対応する動詞 kenna［cʰɛn:a］「教える」，þenja［θɛnja］「広げる」，reyna［rei:na］「試みる」と関連づけた書き分けにすぎない。gakktu［ˌgaxˌdʏ］（ganga［ˌgauŋˌga］「行く」の命令形），bittu［bˌɪhˌdʏ］（binda［bˌɪnˌda］「結ぶ」の命令形）のように，語形変化の整合性よりも発音に律儀な表記はむしろ稀である。

5．子音連続での変化とカナ表記

アイスランド語は原則としてすべての語で第 1 音節に強さアクセント（stress accent）があり，あいまい母音［ə］を欠き，語尾がかなり保たれていることから，アクセントパターンと語形変化の面で例外的に古風な言語とされている。しかし，語中の変化は激しく，enskur「イギリスの」を大陸北

[17] 近年では，x/ks は［ˌks］と発音することがある。Svavar S.（2005：1833），Indriði G./Höskuldur Þ.（2000²：100–102）参照。Magnús P.（1988：11）は þ［θ］を挙げているが，接語化（cliticization）した þið［θɪ:ð］「君たち」は þegiþ þið［θei:jɪðɪð］「だまれ」（命令形）となる。þegiðu［θei:jɪðʏ］「だまれ」（←þú［θu:］「君」）参照。比較的安定している v［v］も á/ó/ú の直後では，g［ɣ］と同様に脱落することがある。例．sjávar［sjau:(v)ar］（sjór「海」の単数属格），lágur［lau:ʏr, (lau:ɣʏr)］「低い」；Magnús P.（1992³：35），Stefán E.（1949²：22，27，391）参照。一般にアイスランド語の有声摩擦音は調音が弱く，脱落しやすい。Kristjan Á.（2005：1562）参照。

ゲルマン諸語の engelsk やフェーロー語の e(i)n(gil)skur と比べれば，革新的な面も散見される。ただし，語末子音は保たれるので，語形変化に影響が出にくいのである。

この事実と 6.1. で述べる音節構造の特徴を反映して，子音連続では種々の変化が認められる。これは正書法に反映されるとは限らない。たとえば，「r＋{l/n}」では中間に［d̥］が挿入されるが，使用頻度の高い語では［r］が脱落し（［rd̥l］/［rd̥l̥］→［d̥l］/［d̥l̥］，［rd̥n］/［rd̥n̥］→［d̥n］/［d̥n̥］），他の子音が後続すると，他の部分も脱落することがある。たとえば，男名の Björn は［b̥jœ(r)d̥n̥］「ビェ（ル）トン」（björn は「熊」）だが，父称は Björnsson［b̥jœs:ɔn］「ビェッソン」である[18]。「愛称」（gælunafn, pet name）も Björnsi［b̥jœs:ɪ］「ビェッシ」であり，Bjössi というつづりもある[19]。別の例として，「{p/k}＋無声子音」では p/k が摩擦音になるので[20]，ks は［xs］であり，Haukur［hœyɣ̊yr］「ヘイクル」（男名，haukur は「鷹」）の息子は Hauksson［hœyxsɔn］「ヘイフソン」となる。しかし，lks では摩擦音化が起こりにくく[21]，Gottskálk［ɣ̊ɔhd̥sɣ̊aul̥ɣ̊］「ゴホトスカウルク」（男名）の息子で 1540 年に初めて新約聖書のアイスランド語訳を刊行した Oddur Gottskálksson は，注 2 に示したように，［ɔd̥:ʏr ɣ̊ɔhd̥sɣ̊aul̥ɣ̊sɔn］「オッドゥル•ゴホトスカウルクソン」である。

一方，「f＋{n/l}」では f が同化によって閉鎖音［b̥］になるので，hrafn［r̥ab̥n̥］「カラス」の複数属格を含む地名 Hrafnagil は［r̥ab̥naɟ̊ɪ:l］「フラプナギール」（hr-［r̥］は「フ＋ラ行子音」で表す）である。ただし，単数属格 hrafns［r̥afs］では fns の n が脱落して［fs］となるので，Hrafnsstaðir という地名は長子音 ss［s:］が 6.1. で述べる「音節均衡」の原則によって短子音［s］に縮約されて，［r̥afsd̥aðɪr］「フラフスタージル」となる[22]。さらに，母音で始まる成分が

[18] Stefán E.（1949²：29，313），Sigfús B.（1920–24：82）参照。

[19] Stefán E.（1949²：29，313），Sigfús B.（1920–24：82），Guðrún K./Sigurður J.（1991：49）参照。

[20]「t＋無声子音」の例は稀なので割愛する。無声子音とは具体的には s/t/k を指す。

[21] Indriði G./Höskuldur Þ.（2000²：210）参照。

[22] 複合語と一部の派生語の後続要素で，発音表記の短母音［…sd̥aðɪr］にたいしてカナ表記の長母音「…スタージル」が生じることについては，6.8.3. で述べる。

後続すると，音節末尾音の s が後続音節の初頭音に組み込まれて，Hrafnseyri［r̥afseirɪ］「フラフセイリ」（地名）となる。しかし，これは筆者の観察では有アクセント音節に限られるので，北部の中心都市 Akureyri の無アクセント音節 -kur- には適用されず，［a:g̊ʏr-ei:rɪ］「アークルエイリ」である[23]。

子音連続での変化は複雑で，語彙によって異なり，話し方も影響するので，単純な規則化は困難である。たとえば，rns については，vatn［vahd̥n̥］「水，湖」，barn［b̥a(r)d̥n̥］「子供」の単数属格は barns［b̥as:］，vatns［vas:］が一般的だが，bernska「幼年時代」には［b̥ɛrnsg̊a, b̥ɛr̥sg̊a, b̥ɛsg̊a］の 3 種類がある[24]。fns についても，hrafns- を第 1 成分とする複合語では［r̥afs］が一般的とされるが，単一語では［r̥ab̥n̥s, r̥ab̥s, r̥afs］の 3 種類が散見される[25]。

rn については，Björn は［b̥jœrd̥n̥］「ビェルトン」よりも［b̥jœd̥n̥］「ビェトン」，Karl は［kʰard̥l̥］「カルトル」よりも［kʰad̥l̥］「カトル」が一般的ともいわれるが，揺れがある。一方，Örn は［r］が脱落しない［œrd̥n̥］「エルトン」（男名，örn は「鷲」），その父称は Arnarson［ard̥narsɔn］「アルトナルソン」が一般的であり[26]，Karl の属格 Karls には［kʰard̥l̥s］「カルトルス」，［kʰals］「カルス」，［kʰarls］「カルルス」の 3 種類がある[27]。その他の語の判断はきわめて微妙である。本稿では上述の Höskuldur Þ./Kristján Á.（1992：102–113）の報告に従って，原則として［d̥］が挿入され，［r］が脱落しない表記を行う[28]。

さらに，「{p/k}＋無声子音」では p/k の摩擦音化が起こるが，語形変化に

[23] Akureyri［a:kʰʏr-ei:rɪ］（Stefán E. 1949²: 302）および 6.8.2. 参照。

[24] Indriði G./Höskuldur Þ.（2000²：97），Kress（1982：41）参照。

[25] Indriði G./Höskuldur Þ.（2000²：118），Stefán E.（1949²：368），Kress（1982：41），Sigfús B.（1920–24：350）参照。

[26] Stefán E.（1949²：501），Sigfús B.（1920–24：1004）では［r］を含み，Берков/Аурни Б.（1962：923）は［(r)］としている。

[27] Indriði G./Höskuldur Þ.（2000²：97, 125），Stefán E.（1949²：381），Sigfús B.（1920–24：420）参照。

[28] Björn G.（1964：69–80）もすでに東部以外でこの傾向を指摘している。

比べて複合語では揺れがある[29]。たとえば，kaup［kʰœyb̥］「購入」の単数属格はほぼ規則的に kaups［kʰœyfs］となる。一方，複合語では，歴史的に商業権を得た小都市 kaupstaður［kʰœyfsd̥aðʏr］「ケイフスターズル」や Neskaupstaður［nɛskʰœyfsd̥a:ðʏr］「ネスケイフスターズル」などの地名，伝統的な kaupfélag［kʰœyf:jɛlaɣ］「商業組合」のように語彙的に固定した例では起こりやすいが[30]，kaupskóli［kʰœy:b̥sk̊oulɪ］「有料学校」のような使用頻度の低い語や kaupferð［kʰœy:b̥fɛrð］「商用旅行」，kaupkona［kʰœy:b̥kʰɔna］「女性商人」のようなふつうの語では起こりにくい。さらに，kaupmaður［kʰœyhb̥maðʏr］「商人」，Kaupmannahöfn［kʰœyhb̥manahœb̥n̥］「コペンハーゲン」のように語彙的に定着した複合語では，m［m］の直前の p が前気音を帯びて［hb̥］となる。kaupstaður，kaupfélag，kaupmaður，Kaupmannahöfn の二重母音 au［œy］は短いが，kaupskóli, kaupferð, kaupkona の au［œy:］は長い。

この種の変化をカナ表記に正確に反映させることは，標準発音を欠く現状ではきわめて困難であり，本稿の内容には洗練の余地がある。本稿の記述範囲は形態論と語形成のレベルにとどめ，単語間と文中あるいは発話での変化は考慮外とする[31]。

---

[29] 語形変化で摩擦音化が起こらないことがある例としては，Magnús P.（1992³：30，45），Indriði G./Höskuldur Þ.（2000²：80 f.）に skip［sk̊ɪ:b̥］「船」の単数属格 skips［sk̊ɪfs］/［sk̊ɪ:b̥s］の記載がある。ただし，Stefán E.（1949²：444），Sigfús B.（1920–24：728），Берков/Аурни Б.（1962：623 f.，959）は摩擦音化した［fs］だけを記している。

[30] Берков/Аурни Б.（1962：933），Magnús P.（1992³：45），Sigfús B.（1920–24：422 f.）参照。Stefán E.（1949²：6，382），Берков/Аурни Б.（1962：353）は -ps-［fs］/［b̥s］，-pf-［f:］/［b̥f］の 2 種類を記載。その他の kaup-の複合語の発音表記も左記の辞書・語彙集による。

[31] 子音変化の詳細や単語間と文中の変化については Pétur H.（1993），Ari Páll K.（1988³：28 ff.），Jón F.（1984²：42–50），Kress（1982：39–42），Stefán E.（1949²：25–29）参照。

6．「音量転換」および「音節均衡」の原則と長短のカナ表記

6.1.「音量転換」および「音節均衡」の原則と音節構造

もうひとつの問題は母音の長短である。アイスランド語は1つの短音を長さの最小単位，すなわち「モーラ」(mora)として，韻律的な長さによって語形変化や語形成が制限を受ける「モーラ言語」(mora language)である。1つの短母音・短子音は1モーラ，1つの長母音・長子音は2モーラに相当する[32]。fs [fs] のような2つの異なる短子音は2モーラに相当し，「長い」とみなされる。古くは，母音の長短の区別には弁別的な機能があった。しかし，中期アイスランド語の時代に起こった「音量転換」(hljóðdvalarbreyting)の結果，母音の長短，つまり「音量」(quantity)は弁別的機能を失い，「音質」(quality)の対立に移行した。これはアイスランド語音韻史で最大の変化とされている[33]。古くは，鋭アクセント記号（「´」，broddur）つきの母音字 á/é/í/ý/ó/ú は長母音を表し，二重母音 au/æ/ei/ey とともに2モーラに相当し，a/e/i/y/o/u/ö（< [ɔ]）は短母音で1モーラに相当していた。しかし，現代語ではこれは質的相違に移行し，長短とは無関係で，たとえば a は [a]/[a:]，á は [au]/[au:] の両方を表す。前者を「張り母音」(breið sérhljóð, tense vowels)または「重母音」(ド schwere Vokale)，後者を「ゆるみ母音」(grönn sérhljóð, lax vowels) または「軽母音」(ド leichte Vokale) と呼ぶことがあるが，両者の相違は「{á/é/í/ý/ó/ú/au/æ/ei/ey}＋nn [n̥n]/[n̥n̥]」対「{a/e/i/y/o/u/ö}＋nn [n]/[n̥]」と語形変化の一部に反映されるにとどまる[34]。

古語では，母音と後続子音が短い各1モーラの音節 [-VC] や長い各2モー

---

[32] デンマーク語を除く現代北ゲルマン諸語はモーラ言語であり，後述する「音節均衡」の原則を示す。

[33] 歴史的発達の詳細は Kristján Á.（1980）参照。

[34] Stefán E.（1949²：11），Kress（1982：19，52 ff.）参照。古ゲルマン諸語共通の「重語幹」(ド schwere Stämme，「長語幹」：「軽母音＋子音1つ」，「重母音＋子音ゼロ」) と「軽語幹」(ド leichte Stämme，「短語幹」：上記以外)の語幹形成要素 v/j の有無を指す。

ラの音節［-V:C:］,［-V:CC］が許されていた。しかし，現代のアイスランド語では母音すべてと子音の一部で長短は弁別的ではなく，相補分布的に決定される。有アクセント音節の「韻」(rhyme)を形成する「(音節)核」(nucleus)の母音と「(音節) 末尾音」(coda) の子音は，どちらかが韻律的に長くなければならない。母音が長いときには後続子音は短いかゼロであり［-V:(C)］，後続子音が長いあるいは 2 つ続くときには母音は短い［-VC:］,［-VCC］。音節構造にかんするこの制約を「音節均衡」(syllable balance)の原則という[35]。

現代アイスランド語の母音の数は 8 つの単母音 (monophthong) と半母音的な狭母音[u]/[i] (>[y]) を後半部とする 3 つの「くだり二重母音」(falling diphthong) の合計 11 であり，その長短はほとんど音質の相違を伴わない[36]。無アクセント音節ではこの原則は適用されず，長母音も長子音も現れない。これは基底の母音を短母音とみなし，有アクセント音節では長母音化が起こるとして，6.2.で述べる例外 (「{p/t/k/s}+{v/j/r}」が後続する場合) を含めて，次のようにまとめることがある (「$」は音節境界を示す)[37]。

V［+stress］→［+long］/___{(C)/{p/t/k/s+v/j/r}}+{V/$}}

しかし，より適切な音節構造の理解は，母音で終わる「開音節」(open syllable,［-V:］) と子音で終わる「閉音節」(closed syllable,［-VC］) を区別することで得られる[38]。開音節では母音に後続する子音は後続音節の「(音節) 初頭音」(onset) に算入され，長母音化が起こって「長音節核」(long nucleus)

[35] 古語ではラテン語と同様に，有アクセントの 2 つの短い開音節が韻律的に 1 つの長音節に相当する「2 音節アクセント母体」(disyllabic accent matrix) が許されていたが，現代アイスランド語では 1 音節だけがアクセント母体になる。Kristján Á.(1998：23 f.) 参照。

[36] Kristján Á. (1998) は通説とは異なって，母音の長短の対立が弁別的にはたらく可能性と短子音の有標性を示唆している。興味深い考察だが，本稿ではこれ以上，追及しない。

[37] Pétur H. (1993：27) 参照 (一部変更)。

[38] 以下の説明は Kristján Á. (2005)，(1998)，(1980)，Kiparsky (1984) による。用例は筆者。

が形成される。閉音節ではそれが起こらずに「短音節核」(short nucleus) が形成され，後続子音がその「補部」(complement) となる。つまり，長母音化は「音節化」(syllabification) の結果と捉えられる。長母音に続く語末子音は長音節核に付随する「韻律外」(extrametrical) の要素であり，後続音節の潜在的な初頭音を形成するとみなす。

1．開音節：［vɪ:］，長音節核：［ɪ:］
vin［vɪ:n］([vɪ:$n])「オアシス」([n]：韻律外子音)
vinur［vɪ:nʏr］([vɪ:$nʏr])「友人」([n]：後続音節初頭音)
2．閉音節：［vɪn］，短音節核：［ɪn］
vinn［vɪn:］([vɪn$n])「(私は) 働く」(後の［n］：韻律外子音)
vinnur［vɪn:ʏr］([vɪn$nʏr])「(彼は) 働く」(後の［n］：後続音節初頭音)
vind［vɪn̥d］([vɪn$d̥])「風 (対格)」([d̥]：韻律外子音)
vindur［vɪn̥dʏr］([vɪn$d̥ʏr])「風 (主格)」([d̥]：後続音節初頭音)

音節間に複数の子音があると，最初の子音が先行音節の末尾音となり，閉音節が形成される (ただし，6.2.で述べる「{p/t/k/s}+{v/j/r}」を除く)。

vinnsla［vɪnsla］([vɪn$sla])「加工」
vinstri［vɪnsd̥rɪ］([vɪn$sd̥rɪ])「左の」

先行音節の末尾音に属さず，後続音節の初頭音を形成しない子音は音節構造として余剰的であり，脱落することがある。5.と 6.4.から 6.6.の例に見られる子音連続での変化の多くは，このために起こると考えられる。

語彙アクセントとは別に，文中または発話で強調アクセントがかかると，閉音節では短母音に後続する子音に長音化が起きる。これがいわゆる「半長子音」([.]) であり，kaldur［kʰal.d̥ʏr］「寒い」，offra［ɔf.ra］「捧げる」([kʰald̥ʏr] ,[ɔfra] の強調発音) の[l.]，[f.] がその例である。kalt［kʰal̥d̥］

「寒い」（中性単数主格）の強調発音［kʰal̥.d̥］が示すように，韻律外子音［d̥］は半長にならない。本稿では「半長」はアクセントに付随する自然な現象とみなして認めない（注 42 参照）。

6.2. 「音節均衡」の原則による長短の区別と例外の規則

有アクセント音節の母音および子音の長短は，カナ表記でも区別する。単一語の第 1 音節以外は無アクセント音節であり，長母音化は起こらず，長子音も現れない。カナ表記では短音で表す。

開音節：長母音↔閉音節：短母音
Anika［a:nɪ̊ga］（［a:$nɪ$̊ga］）「アーニカ」（女名）
↔ Anna［an:a］（［an$na］）「アンナ」（女名）
　Andri［an̥drɪ］（［an$d̥rɪ］）「アンドリ」（男名）

次は複合語の例である。後半部の -hlíð（「斜面」の意味）/-nes（「岬」の意味）は副アクセントを持ち，無アクセントの第 2 音節をはさんで第 3 音節にある。複合語と一部の派生語での長短の区別とカナ表記については，6.8. で述べる。

Fagurhlíð［fa:ɣʏrl̥i:ð］（［fa:$ɣʏr…］）「ファーグルフリーズ」（地名）
↔ Fagranes［faɣranɛ:s］（［faɣ$ra…］）「ファグラネース」（地名）

ただし，単一語で「{p/t/k/s}＋ {v/j/r}」が後続する場合には，母音は長いままである。p/t/k, s は呼気の阻害が著しい典型的な子音だが，本来的な摩擦音ないし接近音（approximant）である v/j, r は逆の性質を持つ[39]。これ

[39] 注 17 で述べたように，アイスランド語の有声摩擦音は調音の度合いが弱く，接近音に近い。Kristján Á.（2005：1562）参照。v［v］以外の有声摩擦音である ð［ð］/g［ɣ］は語頭に現れず，þ［θ］/g［x］の有声の異音と捉えられ，本来的な有声摩擦音とはみなしがたい。

は「子音強度の階層」（consonant strength hierarchy）と関係がある。一般に子音は「わたり音＜流音＜鼻音＜有声継続音＜無声継続音・有声閉鎖音＜無声閉鎖音」の順で強度が高まる。強度が高い子音ほど音節の最初の初頭音にも最後の末尾音にもなりやすく，強度が低い子音ほどなりにくい[40]。p/t/k, s は最も強度が高く，v/j, r は最も低い。p/t/k/s が先行音節の最後の末尾音で v/j/r が後続音節の最初の初頭音の組み合わせは，後半が有標である。それよりも，p/t/k/s が v/j/r をまたいで最初の初頭音を形成するほうがともに無標な組み合わせになるので，優先順位が高い。アイスランド語は後者を選択する言語と考えられ，「{p/t/k/s}+{v/j/r}」は後続音節の初頭音を形成する。これは「最適性理論」（optimal theory）の観点からも妥当であり，自然な音節構造にかなっている。こうして，先行音節は開音節になり，長母音化が起こる。

開音節：V:$（+{p/t/k/s}+{v/j/r}）
Katrín［kʰa:d̥rin］（［kʰa:$d̥rin］）「カートリン」（女名）
Patreksfjörður［pʰa:d̥rɛxsfjœrðʏr］（［pʰa:$d̥rɛxs…］）「パートレヘスフィエルズル」（地名）
Akranes［a:g̊ranɛ:s］（［a:$g̊ra…］）「アークラネース」（地名）
Esja［ɛ:sja］（［ɛ:$sja］）「エーシア」（地名）
Esra［ɛ:sra］（［ɛ:$sra］）「エースラ」（男名）

6.3. 長子音および二重母音の長短とカナ表記

長子音は促音「ッ」と撥音「ン」を用いて Sverrir［svɛr:ɪr］「スヴェッリル」（男名），Anna［an:a］「アンナ」（女名）のように表す。ただし，語末音では外来語のカナ表記として一般的な bb［b̥:］「ッブ」，dd［d̥:］「ッド」，gg［g̊:］

[40] Kristján Á.（1980：38–43），（1998：16 f.）参照。ただし，そこでは「強度が高い子音は音節核から遠ざかり，音節初頭音になりやすい」と主張されている。本稿では「強度が高い子音ほど音節の最初の初頭音にも最後の末尾音にもなりやすい」として，以下の論を進める。

「ッグ」を除いて，韻律外子音はカナ表記せず，nn［n:］「ン」，mm［m:］「ム」，ll［l:］「ル」，rr［r:］「ル」，ff［f:］「フ」，ss［s:］「ス」とする。「ンヌ」，「ンム」，「ッル」，「ッフ」，「ッス」は音節が増える印象を与え，好ましくない[41]。次の地名の例を参照。

Fönn［fœn:］（［fœn$n］）「フェン」↔ Fannalág［fan:alau:ɣ］（［fan$na…］）「ファンナラウグ」
Foss［fɔs:］（［fɔs$s］）「フォス」↔ Fossar［fɔs:ar］（［fɔs$sar］）「フォッサル」
Nes［nɛ:s］（［nɛ:$s］）「ネース」↔ Ness［nɛs:］（［nɛs$s］）「ネス」（属格）

無アクセント音節では長子音は現れない。したがって，短音の表記をする。

Hannes［han:ɛs］（［han$nɛs］）「ハンネス」（男名）
↔ Jóhannes［jou:hanɛs］（［jou:hanɛs］）「ヨウハネス」（男名）（「ヨウハンネス」とはしない）[42]

二重母音（diphthong）は 1 つの単母音（monophthong）と同様に「音節均衡」の原則で 2 モーラにも 1 モーラにもなり，やはり音声学的に長短の区別がある。しかし，カナ表記では 2 モーラの「長い二重母音」に長音符「ー」

[41] 同じく「音節均衡」の原則があるノルウェー語でも，Voss［vɔs:］「ヴォス」（地名），Fram［fram:］「フラム号」のように表記し，「ヴォッス」，「フランム号」とはしていない。ちなみに，「音節均衡」の原則が存在しないドイツ語について，独和辞典などでたとえば kommen［'kɔmən］「来る」のカナ発音を［コンメン］としているのは，首肯しかねる。

[42] Stefán E.（1949[2]：358，380）のように，Hannes［han:ɛ･s］，Jóhannes［jou:han･ɛs］として長音符（:）と半長音符（･）を使い分けている例もある。Sigfús B.（1920–24/1963）も同様。しかし，本稿では半長母音と半長子音をアクセントに付随する自然な現象（'Akzentlänge', Magnús P.（1992[3]：50））とみなして考慮せず，短音として表記する。Берков/Аурни Б.（1962）も同様。Kress（1982：28）参照。

をつけて，たとえば［au:］「アウー」とし，1モーラの「短い二重母音」を［au］「アウ」として区別するのは不自然である。したがって，ともに同一の表記をせざるを得ない。

長い二重母音［VV:］↔短い二重母音［VV］
Á［au:］（［au:$］）「アウ」（地名）　Ás［au:s］（［au:$s］）「アウス」（地名）　Ása［au:sa］（［au:$sa］）「アウサ」（地名）
↔ Ásta［ausd̥a］（［aus$d̥a］）「アウスタ」（女名）
Ástríður［ausd̥riðʏr］（［aus$d̥…］）「アウストリーズル」（女名）
Æsa［ai:sa］（［ai:$sa］）「アイサ」（女名）
↔ Æska［aisg̊a］（［ais$g̊a］）「アイスカ」（女名）
Eyjafjöll［ei:jafjœd̥l̥］（［ei:$ja…］）「エイヤフィエトル」（地名）
↔ Eystrafjall［eisd̥rafjad̥l̥］（［eis$d̥ra…］）「エイストラフィヤトル」（地名）
Ausufjall［œy:sʏfjad̥l̥］（［œy:$sʏ…］）「エイスフィヤトル」（地名）
↔ Austurfjall［œysd̥ʏr̥fjad̥l̥］（［œys$d̥ʏr̥…］）「エイストルフィヤトル」（地名）

6.4. 男名に用いる父称「属格-s＋-son」

子音の長短と子音変化の例として，男名に用いる「属格-s＋-son」の「父称」（föðurnafn, patronymic）を取り上げよう。-s-son［s:ɔn］は無アクセント音節なので長子音［s:］は現れず，［sɔn］に短縮されるので，「…ソン」と表記する[43]。

Jón［jou:n］「ヨウン」→ Jónsson［jounsɔn］「ヨウンソン」

[43] {-ts/-ds}-son［d̥s-sɔn］→［d̥sɔn］は便宜的に「ツソン」と表記する。ただし，実際の発音により近い「ツォン」という表記も考えられる。例．Benediktsson［b̥ɛ:nɛd̥ɪxd̥sɔn］「ベーネディフツソン」（または「ベーネディフツォン」）（人名，姓））

ただし，-s で終わる「名」（fornafn）は-s-s-son［s-s:ɔn］→-sson［sɔn］と短縮されるが，「…ソン」と表記すると，「名」の語幹の「…ス」を欠くことになる。

Jónas［jou:nas］「ヨウナス」→ Jónasson［jou:nasɔn］「ヨウナソン」（「ヨウナスソン，ヨウナッソン」とはしない）
Jóhannes［jou:hanɛs］「ヨウハネス」→ Jóhannesson［jou:hanɛsɔn］「ヨウハネソン」（「ヨウハネスソン，ヨウハネッソン」とはしない）

「名」の部分の語幹が変更を被る例は，ほかにも少なくない[44]。たとえば，ð の音は r/n/g と s の間では脱落することが多い。

Sigurður［sɪ:ɣʏrðʏr］「シーグルズル」→ Sigurðsson［sɪ:ɣʏrsɔn］「シーグルソン」（←［sɪ:$ɣʏr$ðs$$sɔn］）

また，d の音は l/n と g/n/l/k/s の間では脱落することが多い[45]。

Guðmundur［ɡ̊vʏðmʏnd̥ʏr］「グヴズムンドゥル」→ Guðmundsson［ɡ̊vʏðmʏnsɔn］「グヴズムンソン」（←［ɡ̊vʏð$mʏn$d̥s$$sɔn］）

さらに，rn［rd̥n̥］の音は他の子音が後続すると脱落することがある。

Björn［b̥jœrd̥n̥］「ビェルトン」→ Björnsson［b̥jœs:ɔn］「ビェッソン」（←［b̥jœs$sɔn］←［b̥jœr$sɔn］←［b̥jœr$d̥n̥s$$sɔn］）

---

[44] 以下の脱落と用例は Stefán E.（1949²：13，21，29）参照。

[45] 5.の説明参照。íslenska［i(:)slɛnsɡ̊a］「アイスランド語」（← íslenzka ← íslendska ← Ísland［i(:)slanд̥］「アイスランド」）のように正書法に反映されている場合もある。

上記の脱落は 6.1. で説明したように，先行音節の末尾音に属さず，後続音節の初頭音も形成することができない子音 [ðs]/[d̥s]/[rd̥n̥] が音節構造として余剰的なためである[46]。つまり，いずれにせよ「名」の部分の語幹の変更は避けられない。したがって，実際の発音に従ったカナ表記が望ましい。

6.5. カナ表記と和名表記

父称「属格-s＋-son」は -son [sɔn] が sonur [sɔ:nʏr]「息子」と語形的に異なり，副アクセントを欠くことから，複合語よりも派生語の性格が強い。一方，明確な複合による固有名詞では，語構成を尊重するカナ表記を行うべきケースもある。たとえば，Árnessýsla [aurd̥nɛsisla]（地名）は Árness-（Árnes [aurd̥nɛs]「アウルトネス」の属格）＋sýsla「シスラ」（「県」にあたる地域名）の複合語であることが明らかなので，「アウルトネスシスラ」と表記し，「アウルトネシスラ」はあえて避けることにする[47]。Snæfellsnessýsla [snai:fɛlsnɛsisla]「スナイフェルスネスシスラ」(Snæfellsness-（Snæfellsnes [snai:fɛlsnɛ:s]「スナイフェルスネース」の属格）＋sýsla）も同様である[48]。

一方，Húnavatnssýsla [hu:navas:isla]「フーナヴァスシスラ」，Snæfellsjökull [snai:fɛlsjœ:ĝʏd̥l̥]「スナイフェルスイェークトル」では，主格の Húnavatn[hu:navahd̥n̥]「フーナヴァハトン」，Snæfell[snai:fɛd̥l̥]「スナイフェトル」と和名の「シスラ」，「氷河」（jökull）をもとにして，「フーナヴァハトンシスラ」，「スナイフェトル氷河」とする考え方もあるだろう。ただし，それに従うと，Vatnajökull [vahd̥najœ:ĝʏd̥l̥] は「ヴェヘトン氷河」（複数属格 Vatna-[vahd̥na]「ヴァハトナ」← Vötn[vœhd̥n̥]「ヴェヘトン」，

[46] 以上の 3 つの脱落には語彙によって差があり，類書の記述にも異同がある。たとえば，Stefán E.（1949²：29）は［gvʏð･mʏn(d̥)sɔn］と記載している。

[47] Stefán E.（1949²：307）の［aur(d̥)nɛ(s)-sis･la］にたいして，Берков/Аурни Б.（1962：925）は［aur(d̥)nɛsisla］，Sigfús B.（1920–24：43）は［aur･nɛ-sis･la］と記載している。

[48] Берков/Аурни Б.（1962：935），Stefán E.（1949²：452），Sigfús B.（1920–24：770）参照。

vatn の複数主格)となってしまう。この場合には，たんに「ヴァハトナイェークトル」とするか，説明が必要なときには「ヴァハトナイェークトル氷河」のように，「イェークトル」と「氷河」の重複をいとわずに表記する。á [au:]「川」，ey [ei:]「島」，vatn [vahd̥n̥]「湖」などを含む地名も，Langá [lauŋ̊gau]「ラウンガウ，ラウンガウ川」，Grímsey[g̊rimsei]「グリムセイ，グリムセイ島」，Mývatn [mi:vahd̥n̥]「ミーヴァハトン，ミーヴァハトン湖」のどちらかとする。ただし，南北東西などの対比的な命名の場合には，Austur-Húnavatnssýsla[œysd̥ʏr-hu:navas:isla]「東フーナヴァスシスラ」，Vestur-Húnavatnssýsla [vɛsd̥ʏr-hu:navas:isla]「西フーナヴァスシスラ」のように，その部分を和訳表記することがある[49]。

6.6. その他の子音・母音連続での変化

子音連続および母音連続での変化を示す地名をいくつか挙げておこう。

Fljótsdalur [fljousd̥alʏr]「フリョウスダールル」(ts [d̥s] → [s])[50]
Fljótshlíð [fljousl̥ið]「フリョウスフリズ」
Kristskirkja[kʰrɪs:-kʰɪr̥̊ja]「クリスキルキャ」(教会名 sts[sd̥s]→[s:])[51]
Álftanes [aul̥d̥anɛ:s]「アウルタネース」(lft [l̥fd̥] → [l̥d̥])[52]
Álftafjörður [aul̥d̥afjœrðʏr]「アウルタフィエルズル」

---

[49] Берков/Аурни Б.(1962：926，929，935，936)，Stefán E.(1949²：452，479)，Sigfús B.(1920–24：368，915) 参照。Берков/Аурни Б.(1962：929) の [hu:navas:isla] にたいして，Sigfús B.(1920–24：368) は [hu:navasis'la] と記載している。

[50] fljóts- [fljou(d̥)s] は fljót [fljou:d̥] 「川」の単数属格。Берков/Аурни Б.(1962：928)，Stefán E.(1949²：337)，Sigfús B.(1920–24：205) 参照。

[51] Krists- [kʰrɪs:] は Kristur [kʰrɪsd̥ʏr] 「キリスト」の単数属格。Stefán E.(1949²：388) 参照。

[52] álfta- [aul̥̊da] は álft- [aul̥d̥] 「白鳥」の複数属格。Берков/Аурни Б.(1962：925)，Stefán E.(1949²：303) 参照。Берков/Аурни Б.(1962：925) は Álftanes を f を欠く Аультанес と転写している。

「前舌母音 {í/ý/ei/ey/æ}＋母音」の連続では，中間にわたり音の［j］が挿入される。語形変化では，a/u の前では j をつづり（nýr［ni:r］「新しい」↔ nýjan［ni:jan］/nýjum［ni:jʏm］「同左（変化形）」），それ以外ではつづらない（nýir［ni:jɪr］「同左（変化形）」）。しかし，語形変化以外や固有名詞では a/u の前でもつづらない[53]。

Níels［ni:jɛls］「ニーイェルス」（男名）
Bríet［ˌbri:jɛˌd］「ブリーイェト」（女名）
María［ma:rija］「マーリヤ」（女名）
Matt(h)ías［mahˌdijas］「マハティヤス」

6.7. 外国語起源の人名

デンマーク語などの外国語起源の人名には，発音に注意を要するものがある。

Thorarensen［tʰou:rarɛnsɛn］「トウラレンセン」（姓）
Thorsteinsson［tʰɔrsˌdeinsɔn］「トルステイソン」（姓）
Thoroddsen［tʰou:rɔˌdsɛn］「トウロドセン」（姓）
Theódór［tʰɛ:ouˌdou:r］「テーオウドウル」（男名）
Theódóra［tʰɛ:ouˌdou:ra］「テーオウドウラ」（女名）
Thor［tʰou:r］「トウル」（男名，Tór ともつづる）
Thomas［tʰou:mas］「トウマス」（男名，Tómas ともつづる）[54]
Jochum［jɔhˌgʏm］「ヨホクム」（男名，Jokkum ともつづる）
Briem［ˌbri:m］「ブリーム」（人名，姓）

[53] ハルドウル・ラハスネス（Halldór Laxness）の短編『新しいアイスランド』（*Nýja Ísland*）の発表当時の原題は〝*Nýa Ísland*〟である。清水（2009e：192 f.）参照。人名以外の例には blýantur［bli:janˌdʏr］「鉛筆」，Svíi［svi:jɪ］「スウェーデン人」などがある。

[54] ただし，語形変化は異なり，Thómas は不変化，Tómas は与格 Tómasi，属格 Tómasar となる。Guðrún K./Sigurður J.（1991：536，538）参照。

6.8. 複合語と派生語での長短とカナ表記

6.8.1. 子音連続の種類と第 1 要素の母音の長短

アイスランド語では，単一語 (simple word, simplex) が複合や派生によって形態的に長くなると，韻律的に語の長さを短く保つ作用が働き，母音が長くならない傾向がある[55]。この場合の「派生」または「派生語」とは，-lega，-legur，-leiki，-samur，-semi のように副アクセントを持ち得る 2 音節以上の接尾辞によるものを指す。以下では複合語 (compound word) と派生語 (derivative word) を合わせて，「合成語」(complex word) と呼ぶことにしよう[56]。

まず，合成語の第 1 要素について，単一語では長母音として現れる母音の長短を見てみよう。第 1 要素が 1 音節の場合ではどうだろうか。6.2. で述べたように，単一語では「{p/t/k/s}＋{v/j/r}」に先行する母音は長い。一方，合成語では第 1 要素が p/t/k/s で終わると，後続子音の種類に関係なく第 1 要素の母音は長い。このように，合成語では単一語と同じ音節化の規則で長母音化が起こり，単一語の場合よりも制約が弱まるように見える[57]。しかし，合成語と単一語では別の規則が働いていると考えられる。p/t/k/s は子音強

---

[55] この現象は他のゲルマン語でも観察される。英語の south［aʊ］「南」→ southern［ʌ］「南の」，wise［aɪ］「賢い」→ wisdom［ɪ］「知恵」やドイツ語の vier［i:］「 4 」→ vierzehn［ɪ］「14」/vierzig［ɪ］「40」/Viertel［ɪ］「 4 分の 1 」，hoch［o:］「高い」→ Hochzeit［ɔ］「結婚式」のような散発的な例のほかに，西フリジア語では複合語・派生語で「割れ」(breaking)，すなわちくだり二重母音からのぼり二重母音への交替を伴う短母音化が広範に見られる。清水 (1997) 参照。

[56] 亀井/河野/千野 (1996：1131 f.) 参照。

[57] Kristján Á. (2005)，(1998)，(1980) はこの前提で論じており，p/t/k/s は単一語と合成語で同じ規則によって初頭音を形成し，単一語では子音強度が弱い v/j/r に後続子音が限られるが，合成語では後続子音の種類は無関係としている。例. nepja［nɛ:$p̥ja］「厳寒」(単一語)，spaklegur［sp̥a:$ɡ̊lɛɣʏr］「賢明な」(合成語 spak＋legur)，útsýni［u:$t̥sɪ̈ni］「眺め」(合成語 út＋sýni) (発音記号一部変更)；しかし，この考え方では，後述する Hnitbjörg［n̥ ɪ:$t̥b̥jœrɡ̊］「フニートビェルグ」(美術館名，合成語 Hnít＋björg)，Bretland［b̥rɛ:$t̥lanд̥］「ブレートランド」(＝イギリス，合成語 Bret＋land) のように，［t̥b̥-］，［t̥l-］というアイスランド語には存在しない初頭音の組み合わせが生まれてしまう。また，líklega［li:ɣ̊lɛɣa, lihɣ̊lɛɣa］「おそらく」(合成語 lík［li:ɣ̊］＋lega)，húsbóndi［husb̥oundɪ］「家長」(合成語 hús［hu:s］＋bóndi)，kaupstaður［kʰœyfst̥aðʏr］(合成

度が最も高く，最初の音節初頭音だけでなく，最後の音節末尾音も形成しやすい。通常の合成語では，p/t/k/s は形態論的な語構成に対応して音韻論的にも先行要素と後続要素を隔て，先行要素の音節末尾音にとどまっており，後続要素の初頭音を形成していないと考えられる。つまり，p/t/k/s は長音節核を持つ開音節の「韻律外子音」のままである。この場合の「第 1 要素＋後続要素」は，形態論的にも音韻論的にも 2 つの要素から成ると考えられる。つまり，2 つの「音韻論的単一語」（phonological simplex）から成り，音韻論的な語境界（「$$」で示す）が弱まらず，別々の語として発音される[58]。

① 複合語

Hrísnes［ɾ̥i:snɛs］（［ɾ̥i:s$$nɛs］）「フリースネス」（地名）（nes［nɛ:s］「岬」）[59]

Hnitbjörg［n̥ɪ:d̥b̥jœrg̊］（［n̥ɪ:d̥$$b̥jœrg̊］）「フニートビェルグ」（美術館名）（björg［b̥jœrg̊］「岩」）

Bretland［b̥rɛ:d̥land̥］（［b̥rɛ:d̥$$land̥］）「ブレートランド」（＝イギリス）（land［land̥］「国」）[60]

語 kaup［kʰœyb̥］＋staður）「ケイフスターズル」，kaupskóli［kʰœy:b̥sk̊oulɪ］（合成語 kaup［kʰœyb̥］＋skóli）「有料学校」のような例も説明できない。単一語と合成語では「{p/t/k/s}＋後続子音」の振る舞いは異なる規則に基づくのであり，音節化だけが問題となる単一語と違って，合成語では語構成に応じた音韻論的な語境界も問題にしなければならない。また，p/t/k/s が子音強度が最も高く，音節核からできるだけ離れようとし，音節初頭音を形成しやすいとする前提にも問題がある。p/t/k/s は音節初頭音の最初の要素だけでなく，音節末尾音の最後の要素も形成しやすいという前提に立つ必要がある。

[58] Kreß（1937：14 f.）は，閉鎖音 p/t/k は単一語では n/l/v/j/r を除いて，語形変化以外に音節末尾音の位置で後続子音を伴わず，s にも有気閉鎖音と v/j を除く摩擦音は音節末尾音の位置で後続しないのであり，つまり，例外的ないし頻度の低い子音連続が現れるために，語境界が弱まらないと述べている。例外的ないし頻度の低い子音連続はやはり現れることがあるので，完全に正しいとはいえないが，全体の趣旨は的を得ている。

[59] ［…-nɛs］ ← ［…-nɛ:s］ のような後続要素の母音の長短については，6.8.3.参照。

[60] Stefán E.（1949²：317，368，370）参照。Mosfellsheiði［mɔ:sfɛls-hɛɪ:ðɪ, mɔs…］「モースフェルスヘイジ，モス…」（［mo:s…, mos…］ Sigfús B.（1920–24：XIX，557），［mɔ:s…］ Stefán E.（1949²：410），［mɔs…］ Берков/АурниБ.（1962：932）），Ásgeir［au:sj̊eir, aus…］「アウスギェイル」（男名）（Sigfús B.（1920–24：XIX）など，異同を示す語もある。

② 副詞派生接尾辞 -lega［lɛɣa］（← ［lɛ:ɣa］）による派生語（カナ表記略）
sviplega［svɪ:b̥lɛɣa］（［svɪ:b̥$$lɛɣa］）「突然」
fljótlega［fljou:d̥lɛɣa］（［fljou:d̥$$lɛɣa］）「即座に」
spaklega［sb̥a:ǥlɛɣa］（［sb̥a:ǥ$$lɛɣa］）「賢明に」
ljóslega［ljou:slɛɣa］（［ljou:s$$lɛɣa］）「明らかに」

ただし，語彙的に固定した合成語では，第 1 要素が p/t/k/s で終わっていても，短母音が現れることがある。たとえば，líklega［li:ǥlɛɣa］「おそらく」は［lihǥlɛɣa］とも発音する[61]。これはこの語が líkl［li:ǥ］「同じ」からの派生と意識されないほど語彙的に固定し，音韻論的にも全体で 1 つの単一語の扱いを受けて，語境界が弱まっているためである。k は l と子音連続を形成し，kl で規則的に見られるように前気音を伴って k［hǥ］となり，語幹母音は短い。次例も同様である。

vitlaus［vɪ:d̥lœys, vɪhd̥lœys］（［vɪhd̥$lœys］←［vɪ:d̥$$lœys］）「気が狂った」（vit［vɪ:d̥］「理解，理性」＋接尾辞 -laus［lœy:s］「…を欠いた」）
Ísland［i:slanˌd, islanˌd］（［is$lanˌd］←［i:s$$lanˌd］）「アイスランド」（ís［i:s］「氷」＋land［lanˌd］「国」）[62]
húsbóndi［husb̥oundˌɪ］（［hus$b̥ounˌdɪ］←［hu:s$$b̥ounˌdɪ］）「家長」（hús［hu:s］「家」＋bóndi［b̥ounˌdɪ］「農夫，夫」）

第 1 要素が p/t/k/s 以外の子音で終わる場合には，形態論的には 2 つの要素から成るが，音韻論的には子音強度がそれほど強くないために，語境界が

[61] Sigfús B.（1920–24：497）は［lihǥ…］に相当する発音だけを記している。
[62] Берков/Аурни Б.（1962：930）と Sigfús B.（1920–24：404）は［i:s…, is…］，Stefán E.（1949²：378）は［i:s…］だけを記載。［i:sd̥lanˌd］のように，わたり音［d̥］が挿入されることもある。Ari Páll K.（1988³：50，60），Indriði G./Höskuldur Þ.（2000²：77）参照。

弱まって子音連続を形成し，１つの音韻論的単一語になると考えられる。その結果，第１要素の末尾音の子音の１つは短音節核の母音の補部となり，短母音が現れる[63]。

① 複合語

Selfoss［sɛlfɔs］（［sɛl$fɔs］← ［sɛ:l$$fɔs］）「セルフォス」（地名）（sel［sɛ:l］「家畜小屋」＋foss［fɔs:］「滝」）

Hvalfjörður［kʰvalfjœrðʏr］（［kʰval$fjœr…］← ［kʰva:l$$fjœr…］「フヴァルフィエルズル」（地名）（hvalur［kʰva:lʏr］「鯨」＋fjörður［fjœrðʏr］「フィヨルド」）

Danmörk［d̥anmœrɡ̊］（［d̥an$mœrɡ̊］←［d̥a:n$$mœrɡ̊］）「ダンメルク」（＝デンマーク）（Dani［d̥a:nɪ］「ダーニ」（＝デンマーク人）＋mörk［mœrɡ̊］「辺境，国境」）

② 副詞派生接尾辞 -lega［lɛɣa］（← ［lɛ:ɣa］）による派生語（カナ表記略）

glaðlega［ɡ̊laðlɛɣa］（［ɡ̊lað$lɛɣa］ ← ［ɡ̊la:ð$$lɛɣa］）「快活に」

ríflega［rivlɛɣa］（［riv$lɛɣa］ ← ［ri:v$$lɛɣa］）「豊富に」

daglega［d̥aɣlɛɣa］（［d̥aɣ$lɛɣa］ ← ［d̥a:ɣ$$lɛɣa］）「毎日」

rúmlega［rumlɛɣa］（［rum$lɛɣa］ ← ［ru:m$$lɛɣa］）「たっぷり」

kynlega［kʰɪnlɛɣa］（［kʰɪn$lɛɣa］ ← ［kʰɪ:n$$lɛɣa］）「奇妙に」

sérlega［sjɛrlɛɣa］（［sjɛr$lɛɣa］ ← ［sjɛ:r$$lɛɣa］）「とくに」

---

[63] Kristján Á.（1980：48 ff.）参照。Sigfús B.（1920–24）の冒頭の発音解説で初めてモダンなアイスランド語の音韻記述を行い，同辞典の発音表記を担当したヨウン・オウフェイフソン（Jón Ófeigsson）は，「有アクセント母音が長かった場合，その語が複合語の第１要素になると，語末子音は長くなると同時に，一般にその母音はある特定の位置で短くなる」（"…hvor den trykstærke Vokal har været lang, forkortes den i Reglen i visse Stillinger, naar Ordet bliver første Led i et sammensat Ord, samtidig med at den udlydende Konsonant forlænges.", Jón Ó.（1920–24：XIX））と述べ，その位置を「第１要素の語末音が p/t/k/s 以外の場合」と的確に指摘している。ただし，「短母音化」が起こるとみなすことには問題がある。

子音についても同様に，単一語の長子音は短子音として現れる。

Finnland［fɪnlanˌd］（［fɪn$lanˌd］←［fɪn:$$lanˌd］）「フィンランド」（地名）（Finni［fɪn:ɪ］「フィンニ」（＝フィンランド人）＋land［lanˌd］「国」）
Rússland［ruslanˌd］（［rus$lanˌd］←［rus:$$lanˌd］）「ルスランド」（＝ロシア）（Rússi［rus:ɪ］「ルッシ」（＝ロシア人））
Framsókn［framsɔhˌgˌn］（［fram$sɔhˌgˌn］←［fram:$$sɔhˌgˌn］）「フラムソホクン」（雑誌名，「進歩」の意味）（fram［fram:］「前へ」＋sókn［sɔhˌgˌn］「攻撃」）

5.で挙げた kaup［kʰœy:bˌ］「購入」を第１要素とする複合語も，これで説明できる。語彙的に固定した次例では，音韻論的な語境界が弱まり，１つの音韻論的単一語を形成するので，子音連続での変化が起こり，au［œy］は短母音である。

kaupstaður［kʰœyfsˌdaðʏr］（［kʰœyf$sˌda…］←［kʰœy:bˌ$$sˌda…］「ケイフスターズル」（＝伝統的な商業都市）
Neskaupstaður［nɛskʰœyfsˌda:ðʏr］（［…kʰœyf$sˌda:…］←［…kʰœy:bˌ$$sˌda:…］）「ネスケイフスターズル」（地名）
kaupfélag［kʰœyf:jɛlaɣ］（［kʰœyf$fjɛ…］←［kʰœy:bˌ$$fjɛ…］）「商業組合」
kaupmaður［kʰœyhbˌmaðʏr］（［kʰœyhbˌ$ma…］←［kʰœy:bˌ$$ma…］）「商人」
Kaupmannahöfn［kʰœyhbˌmanahœbˌnˌ］（［kʰœyhbˌ$ma…］←［kʰœy:bˌ$$ma…］）「コペンハーゲン」

しかし，一般的な語では，音韻論的な語境界は弱まらず，２つの音韻論的単一語を形成したままで，子音連続での変化は起こらず，au［œy:］は長母音である。

kaupskőli［kʰœy:b̥sg̊oulɪ］（［kʰœy:b̥$$sg̊ou…］）「有料学校」
kaupferð［kʰœy:b̥fɛrð］（［kʰœy:b̥$$fɛrð］）「商用旅行」
kaupkona［kʰœy:b̥kʰɔna］（［kʰœy:b̥$$kʰɔ…］）「女性商人」

6.8.2. 音節境界の移動と第 1 要素の母音の長短

後続要素が母音または h［h］で始まると，第 1 要素が子音で終わる 1 音節の合成語では，語末音の種類に関係なく，第 1 要素の母音は長い[64]。これは第 1 要素の語末音が子音の種類とは無関係に後続要素の第 1 音節の初頭音になり，音節境界が移動するためである。h［h］が加わるのは，呼気の流れを阻害しにくく，無声化した母音に相当し[65]，脱落しやすいほど弱いためである。第 1 要素と後続要素の音韻論的な語境界は弱まり，やはり 1 つの音韻論的単一語を形成している。

「{母音/h}＄，長母音」↔「h 以外の子音＄，短母音」
① Þórey［θou:rei］（［θou:$rei］←［θou:r$$ei］）「ソウレイ」（女名）（Þór［θou:r］「ソウル」（男名）＋-ey［ei:］）
Þórarinn［θou:rarɪn］「ソウラリン」（男名）
Þórhallur［θou:r(h)ad̥lʏr̥］「ソウルハトルル」（女名）
↔Þórdís［θourd̥is］（［θour$d̥is］←［θou:r$$d̥is］）「ソウルディス」（女名）（Þór＋-dís［d̥i:s］）

---

[64] ヨウンはまた，「複合語の後続要素が母音または h（＋母音）で始まれば，第 1 要素の母音の長さは変わらない。…後続要素が子音（「h＋母音」を除く）で始まれば，第 1 要素の母音は短くなる」（“Hvor sidste Sammensætningsled begynder med Vokal eller *h* med efterfølgende Vokal, er Længden uforandret i første Led. … Hvor sidste Sammensætningsled begynder med Konsonant (undtagen *h* med efterfølgende Vokal), forkortes Vokalen i første Led…”, Jón Ó. (1920–24: XIX)）と的確に述べている。

[65] Kreß（1937：15，168 ff.）参照。Sveinbjörn S.（1933）は［h］の代わりに母音の無声化の記号［̥］を一貫して用いている。

Þórbergur［θourˌbɛrˌgʏr］「ソウルベルグル」(男名)[66]

② miðaldir［mɪ:ðalˌdɪʏr］([mɪ:$ðal…] ← [mɪ:ð$$al…])「中世」(mið-［mɪ:ð］「中…」+aldir［alˌdɪr］「時代」)

miðaftann［mɪ:ðafˌtan］「午後 (16～18 時)」[67]

↔ miðbær［mɪðˌbair］([mɪð$ˌbair]←[mɪ:ð$$ˌbair])「都心，繁華街」(bær［ˌbai:r］「町」)

miðnætti［mɪðnaihˌtɪ］「真夜中」

③ afundinn［a:vʏnˌdɪn］([a:$vʏn…] ← [a:v$$ʏn…])「不機嫌な」(af［a:v］「…から離れて」+undinn［ʏnˌdɪn］(過去分詞)＜unna「愛する」)

afhenda［a:v(h)ɛnˌda］「引き渡す」

↔ afkasta［afkʰasˌda］([af$kʰas…] ← [a:v$$kʰas…])「成し遂げる」(kasta［kʰasˌda］「投げる」)

afgreiða［avˌgreiða］「給仕する」[68]

これは á［au:］「川」，ey［ei:］「島」，eyri［ei:rɪ］「砂州」，endi［ɛnˌdɪ］「端」などの母音で始まる要素を含む合成語による地名でも同様である[69]。

Rangá［raunˌgau］「ラウンガウ」(Rang+á)

Viðey［vɪ:ðei］「ヴィーゼイ」(við+ey)

---

[66] Stefán E. (1949²：495)，Sigfús B. (1920–24：979) 参照。

[67] Stefán E. (1949²：407)，Sigfús B. (1920–24：542 ff.) 参照。

[68] Stefán E. (1949²：300 f.)，Kreß (1937：15)，Sigfús B. (1920–24：11 ff.) 参照。

[69] á「川」，ey「島」との複合であることを強調し，語頭母音の前に声門閉鎖音［ʔ］を置いて，Hvítá［kʰviːˌdʔau］「クヴィートアウ」，Viðey［vɪːðʔei］「ヴィーズエイ」と発音することもある。しかし，これは注 12 で述べたように，語彙レベルの問題ではない。一方，第 1 要素が 1 音節の場合に後続要素との音節境界の移動が起こらない例として，接頭辞 all-［aˌdl］「まったく」による派生語がある。例．allólíkur［aˌdl-ouːliːˌgʏr］「まったく似ていない」; Stefán E. (1949²：303) 参照。ただし，接頭辞 all-は第 1 音節にもかかわらず，まったく例外的に無アクセントであるといわれることがある。Stefán E. (1949²：4）参照。

Hvanneyri［kʰvan:eirɪ］「クヴァンネイリ」（hvann＋eyri）

この場合には，p/t/k/s のような強度が高い子音も後続音の初頭音になる。母音間の子音は音節末尾音よりも音節初頭音になる傾向が強いといえる。

Hvítá［kʰvi:d̥au］「クヴィータウ」（hvít＋á）
Flatey［fla:d̥ei］「フラーテイ」（flat＋ey）
Þjórsá［θjoursau］「ショウルサウ」（þjórs＋á）

ただし，筆者の観察では，音節境界の移動は合成語の第 1 要素が 1 音節の場合に限られる。合成語の第 1 要素が 2 音節以上の場合には，第 2 音節は無アクセント音節であり，音節境界の移動は起こらない（[-] は発音の切れ目を示す）。つまり，音節境界の移動は主アクセントの直後の音節だけに起こる[70]。

「1 音節：音節境界移動」↔「2 音節以上：音節境界そのまま」
Skaftá［sk̊afd̥au］（［sk̊af$d̥au］←［sk̊afd̥$$au:］）「スカフタウ」（Skaft＋á）
↔ Öxará［œxsar-au:］（［œx$sar$$au:］）「エヘサルアウ」（Öxar＋á）
Skeiðará［sk̟ei:ðar-au:］（［sk̟ei:$ðar$$au:］）「スキェイザルアウ」（Skeiðar＋á）
Flateyri［fla:d̥eirɪ］（［fla:$d̥ei…］←［fla:d̥$$ei…］）「フラーテイリ」（Flat＋eyri）
↔ Akureyri［a:k̊ʏr-ei:rɪ］（［a:$k̊ʏr$$ei:…］）「アークルエイリ」（Akur＋eyri）
Vatnsendi［vas:ɛnd̥ɪ］（［vas$sɛn…］←［vas:$$ɛn…］）「ヴァッセンディ」（Vatns＋endi）
↔ Hlíðarendi［l̥i:ðar-ɛnd̥ɪ］（［l̥i:$ðar$$ɛn…］）「フリーザルエンディ」

[70] ただし，話し方や速度で微妙に異なり，実際の調査では判定は容易ではない。

(hlíðar＋endi)[71]

第 1 要素が 2 音節以上の場合には，音韻論的な語境界は弱まらず，第 1 要素と後続要素は 2 つの音韻論的単一語を形成し，別々の語として発音される。後続要素の第 1 音節の母音は Öxará/Skeiðará［…au:］，Akureyri［…ei:ri］のように，単一語の á［au:］，eyri［ei:ri］と同様に長い。一方，第 1 要素が 1 音節の Skaftá［…au］，Flateyri［…eirɪ］では短い。前者の 3 例を合成語として音韻論的に特徴づけているのは，第 1 要素の第 1 音節が主アクセント，後続要素の第 1 音節が副アクセントを担うことだけである[72]。

次例は Hlíðarenda＋kot「小屋」という 2 つの音韻論的単一語の複合による。Hlíðarendi［l̥i:ðar-ɛnd̥ɪ］は 2 つの音韻論的単一語から成るが，上位の合成語の構成要素となる場合には，Hlíðarenda-［l̥i:ðarɛnd̥a…］のように 1 つの音韻論的単一語を形成し，音節境界の移動が起こる。このように，合成は 2 つの要素の間で起こり，構成要素の内部では音韻論的な語境界が弱まって，上位の合成に循環的に適用されると考えられる。

Hlíðar-［l̥i:ðar］＋-endi［ɛnd̥ɪ］→ Hlíðarendi［l̥i:ðar-ɛnd̥ɪ］「フリーザルエンディ」
Hlíðarenda-［l̥i:ðarɛnd̥a］＋-kot［kʰɔ:d̥］→ Hlíðarendakot［l̥i:ðarɛnd̥a-kʰɔ:d̥］「フリーザレンダコート」（地名）[73]

同様の理由で，第 1 要素が母音で終わる 2 音節以上の場合には，第 1 要素の第 1 音節の母音は長い。

---

[71] Öxará, Skeiðará, Akureyri, Hlíðarendi の発音は Stefán E.（1949²：501，443，302，366）参照。

[72] 固有名詞以外の例は neðanundir［nɛ:ðan-ʏndɪr］「…の下に」，norðanátt［nɔðan-auhd̥］「北風」，suðurátt［sʏ:ðʏr-auhd̥］「南風」など。Stefán E.（1949²：413，415，460）参照。

[73] Stefán E.（1949²：366）参照。

Húsavík［hu:savi:ǥ］「フーサヴィーク」（地名，vík「入り江」）
↔ Lúðvík［luðviǥ］「ルズヴィク」（男名，vík＜wig「戦闘」）
Dalasýsla［d̥a:lasisla］「ダーラシスラ」（地名，sýsla「シスラ，県」）
↔ Dalvík［d̥alviǥ］「ダルヴィク」（地名）
Breiðidalur［b̥rei:ðɪd̥a:lʏr］「ブレイジダールル」（地名，dalur「谷」）
↔ Breiðdalur［b̥reiðd̥alʏr］「ブレイズダールル」（地名）

なお，第１要素そのものが合成語で，母音で終わっている場合には，後続要素が母音で始まっていると，第１要素の語末音の母音が脱落する傾向が認められる。この点はさらに調査を要する。次例では母音が脱落したカナ表記を示す。

Vestmannaeyjar［vɛsd̥man(a)-ei:jar］「ヴェストマンエイヤル」（地名，［Vest-＋-manna］-＋-eyjar）[74]
Dyrhólaey［d̥ɪ:r(h)oul(a)-ei:］「ディールホウルエイ」（地名，［Dyr-＋-hóla］-＋-ey）[75]

6.8.1.と 6.8.2.をまとめると，単一語のレベルの長母音が合成語第１要素に現れた場合の長短は，次のようになる。

第１要素１音節，{p/t/k/s}$$子音：長い
第１要素１音節，{p/t/k/s}$$子音（語彙的に固定した語）：短いことがある
第１要素１音節，{p/t/k/s 以外}$$子音：短い
第１要素１音節，$${母音/h}：長い
第１要素２音節以上，$${母音/h［h］}：長い

[74] Stefán E.（1949²：484）は Vestmanna…の最後の a を［…(a)…］と記載している。Берков/Аурни Б.（1962：936），Sigfús B.（1920–24：932）では［a］の記載はない。
[75] Берков/Аурни Б.（1962：927），Sigfús B.（1920–24：133）参照。

第 1 要素 2 音節以上，$${h［h］以外の子音}：長い

6.8.3. 後続要素での母音の長短とカナ表記の問題

今度は後続要素の母音の長短を見てみよう。まず，第 1 要素が 2 音節以上の場合には，後続要素が子音で始まっていても，後続要素の第 1 音節の母音は長い。次の地名の後続要素の母音は，単一語の場合と同様に長い。

Reykjavík［rei:ˌjavi:ˌg］「レイキャヴィーク」(-vík［vi:ˌg］← vík［vi:ˌg］「入り江」)
Bolungarvík［ˌbɔ:lʏŋˌgarvi:ˌg］「ボールンガルヴィーク」
Reykjanes［rei:ˌjanɛ:s］「レイキャネース」(-nes［nɛ:s］← nes［nɛ:s］「岬」)
Seltjarnarnes［sɛlthjarˌdnarnɛ:s］「セルティヤルトナルネース」[76]
Barmahlíð［ˌbarmaˌl̥i:ð］「バルマフリーズ」(-hlíð［ˌl̥i:ð］← hlíð［ˌl̥i:ð］「斜面」)

一方，第 1 要素が 1 音節の場合には，後続要素の第 1 音節の母音は短い。したがって，地名の Laxnes は Halldór Laxness「ハルドウル・ラハスネス」（人名）の属格 Laxness［laxsnɛs］と発音が等しい。なお，上述のように，Dalvík では第 1 要素の dal-［ˌdal］（← dalur［ˌda:lʏr］「谷」）も短母音である。

Dalvík［ˌdalviˌg］「ダルヴィク」（地名）（-vík［viˌg］← vík［vi:ˌg］）
Laxnes［laxsnɛs］「ラハスネス」（地名）（-nes［nɛs］← nes［nɛ:s］）
Fljótshlíð［fljousˌl̥ið］「フリョウスフリズ」(地名) (-hlíð［ˌl̥ið］← hlíð［ˌl̥i:ð］)
Nordal［nɔrˌdal］「ノルダル」（人名，姓）（-dal［ˌdal］← dal［ˌda:l］）

これにはアクセントが関係している。アイスランド語では原則として語の

[76] Stefán E. (1949²： 3，435) に従えば，Seltjarnarnes［sɛlthjaˌdnarnɛ:s］「セルティヤトナルネース」となる。

第1音節が主アクセント(¹)を担うが，副アクセント(²)には2通りのパターンがある。ひとつは単一語でのパターンで，強弱の交替によるリズムによって，第3音節，第5音節…のように1音節おきに置かれていく。たとえば，古代バビロニアのネブカドネザル王(2世)は ¹Nebú²kadne²sar となる[77]。もうひとつは合成語でのパターンで，語形成のレベルを優先して後続要素の第1音節に置かれる。たとえば，上の例は ¹Hlíðar²endi, ¹Hlíða³renda²kot となる[78]。ところが，第1要素が1音節の合成語では，両者のパターンが一致せず，十分に副アクセントが置かれない。そのために，後続要素の第1音節は有アクセント音節の扱いを受けず，十分な長さを獲得できない。一方，第1要素が2音節以上の合成語では，後続要素の第1音節は先行する無アクセント音節あるいは弱アクセント音節との対比から，有アクセント音節の扱いを受ける。そのために，通常の合成語でのアクセントパターンによって副アクセントを担うので，長母音化は妨げられない[79]。

問題は後続要素が2音節以上の場合である。後続要素の第1音節は長母音

---

[77] 清水(2009：202–214)所収のハルドウル・ラハスネス『リリア』参照。Kristján Á.(1980：44)は¹alma²nak「年鑑」，¹alma²naka²nna「同左，複数属格」を例に挙げている。

[78]「³」は「²」よりも弱い音節を示す。Kristján Á.(1980：46 f.)は単一語 ¹raka²ra-「理髪師(の)」(←¹raka²ri)と ¹meista²ri「名人」による複合語 ¹raka³ra²meista³ri「名理髪師」を例に挙げている。なお，Dídí [ḍi:ḍi:]「ディーディー」，Lólló [lou:lou:]「ロウロウ」などの -í/-ý/-ó で終わる比較的新しい女名の愛称(Guðrún K./Sigurður J. 1991: 51f.)は「重複」(reduplication)によると考えられる。また，¹Elísa²bet [ɛ:lisa-bɛ:ḍ](Stefán E.(1949²：328)は民間語源的に Elísa＋bet という複合語の扱いを受けていると推察される。

[79] この点についても，上述のヨウンは次のように的確に指摘している：「有アクセント音節の直後に後続する半有アクセント音節は，長音が半長音になり，半長音がまったくの短音になるように，短縮される。…副アクセント音節(すなわち，半有アクセント音節の前に1つまたは複数の無アクセント音節がある場合)は，有アクセント音節と同じ長さを担うことができる」(“En halvstærk Stavelse, der følger umiddelbart efter en Stavelse med stærkt Tryk, svinder ind saaledes at fuld Længde bliver halv Længde og halv Længde forkortes helt… En Stavelse med stærkt Bitryk (ɔ: naar der staar en eller flere tryksvage Stavelser foran den halvstærke Stavelse) kan have de samme Længdeforhold som en stærk Stavelse…”, Jón Ó. (1920–24: XIX))

化を受けないとはいっても，たとえば地名の Mýrdalur［mirˌdalʏr］では，-dalur の a は u よりもやや強く発音し，音声学的にやや長い。たとえば，Stefán E.（1949²：411）と Sigfús B.（1920–24：548）はこの語の a を半長母音，u を短母音として記載している。注 79 に引用した Jón Ó.（1920–24：XIX））も，有アクセント音節の直後に後続する「半有アクセント音節」（“en halvstærk Stavelse”）では，長音が「半長音」（“halv Længde”）に短縮されると述べている[80]。しかし，カナ表記では半長母音の表記は不可能なので，長母音と短母音のどちらかの表記を選択する必要がある。単一語の dalur［ˌdaːlʏr］「谷」のカナ表記は「ダールル」である。合成語のレベルだけの表記を行えば，Mýrdalur は「ミルダルル」だが，単一語のレベルでの表記を重視すれば，「ミルダールル」となる。本稿では後者に従い，あえて長母音で「ミルダールル」とカナ表記する。

この方策の利点は，単一語でも合成語でも，(-)dalur は「ダールル」と表記できるので，単一語と合成語の整合性が保たれることである。別の例を取れば，「(…) 通り」を意味する(-)gata は，単一語では gata［ɡaːˌda］「ガータ」である。合成語では，第 1 要素が 2 音節以上の Lækjargata［laiːˌjarɡaːˌda］「ライキャルガータ」だけでなく，1 音節の Túngata［tʰunɡaˌda］「トゥンガータ」（「トゥンガタ」とはしない）も単一語と同じ「…ガータ」と表記できる。一方，欠点としては，Mýrdalur［mirˌdalʏr］「ミルダールル」（主格）にたいして，Vík í Mýrdal［viːɡ iː mirˌdal］「ヴィーク・イー・ミルダル」（Mýrdal は与格，「…ミルダール」とはしない）[81] という地名が示すように，語形変化で

[80] 後続要素はアクセントを持たず，その母音を短母音とみなす意見もある。注 84 参照。これは半長母音や半有アクセントを認めず，合成語のレベルだけで，主アクセントを担う第 1 要素の母音との対比を重視する考え方である。本稿では発音記号の表記はこれに従う。

[81] Vík í Mýrdal は，機能語で弱く発音される前置詞 í［iː］（英 *in*）が長母音化を妨げられて短母音［i］となることを考慮して，「ヴィーク・イ・ミルダル」とすることも考えられる。同じく，接続詞 og［ɔːɣ］→［ɔ］（英 *and*）を含む Mál og menning「マウル・オーグ・メンニング」（会社名）は，「マウル・オ・メンニング」と表記することも不可能ではない。

語尾を欠く1音節になる場合には「…ダールル」対「…ダル」となって，一貫性に欠ける点が挙げられる。しかし，Mýrdalsjökull［mird̥alsjœ:ɡ̊ʏd̥l̥］「ミルダルスイェークトル」では，「音節均衡」の原則によって属格の-dals-［d̥als］のaは短母音なので，「ミルダールス…」という表記は不可能である。したがって，語形変化で語形が異なれば，いずれにせよ同一の語でも表記が異なることは避けられない。

もうひとつの欠点は，単一語のVík［vi:ɡ̊］「ヴィーク」にたいして，合成語では，第1要素が1音節のDalvík［d̥alviɡ̊］「ダルヴィク」と2音節以上のReykjavík［rei:j̊avi:ɡ̊］「レイキャヴィーク」，Bolungarvík［b̥ɔ:lʏŋɡ̊arvi:ɡ̊］「ボールンガルヴィーク」との間で，「…ヴィク」対「…ヴィーク」という異なる表記になることである。しかし，これは前者のDalvíkでは後続要素の長母音化が妨げられるという現象を的確に示すために，必要不可欠な措置といえる。一方，「ダルヴィーク」はアイスランド語の音節構造を無視した不正確なカナ表記である。それならば，当然，「ダールヴィーク」という単一語のレベルだけを重視した表記をするべきだが，これではアイスランド語の音節構造を二重の意味で無視したさらに不正確なカナ表記になってしまう。本来，Mýrdalur［mird̥alʏr］，Túngata［tʰunɡ̊ad̥a］には「ミルダルル」，「トゥンガタ」というカナ表記が最も正確である。それでもなお，「ミルダルール」，「トゥンガータ」というカナ表記を取ろうという本稿の提案は，アイスランド語の発音を尊重し，日本語の呼び名として不自然さをできるだけ回避しようとする苦肉の策と理解されたい。

最後に，発音記号による表記に触れておこう。上述のように，Stefán E.（1949²）とSigfús B.（1920–24）は後続要素が1音節と2音節以上のどちらの場合も，半長母音で記載している[82]。しかし，本稿では発音記号でも半長母音を認めないので，長母音か短母音かの選択になる。Берков/Аурни Б.（1962）は後続要素が1音節と2音節以上のどちらの場合も，短母音として記載して

[82] 例．Mýrdalur［mir·da·lʏr̥］，Mýrdalsjökull［mir·dals-jö:kʰʏd̥l̥］，Nordal［nɔr·da·l］（Stefán E. 1949²: 411, 415）参照。Sigfús B.（1920–24）も本質的に同様。

いる[83]。音韻を扱った近年の概説書 Ari Páll K.（1988³），Jón F.（1984²），Magnús P.（1992³）も同様であり[84]，この方式が大半を占めている。結論として，本稿では近年の趨勢に従って，発音記号による表記では，後続要素が1音節と2音節以上のどちらの場合も短母音として記載する。したがって，Mýrdalur［mird̥alʏr］「ミルダールル」のように，［a］対「アー」のような「発音表記：短母音」対「カナ表記：長母音」という食い違いが生じることは避けられない。

長子音についても，上記の方針に沿って表記する。次例で Almannagjá, Sigtryggur は「アルマナギャウ」，「シフトリグル」ではなく，あえて「アルマンナギャウ」，「シフトリッグル」と表記する。

Hermann［hɛrman］「ヘルマン」（男名）
Manni［man:ɪ］「マンニ」（男名）
Almannagjá［almanaǧjau:］「アルマンナギャウ」（地名，［Almanna-（← Al-＋manna［man:a］）＋-gjá）
Sigtryggur［sɪxtʰrɪǧʏr］「シフトリッグル」（男名，Sig-＋-tryggur［tʰrɪǧ:ʏr］）

まとめとして，Sig-/Sigur-を第1要素とする合成語の人名で例示してみよう。

---

[83] 例．Mýrdalur［mird̥alʏr̥］，Mýrdalsjökull［mird̥alsjö:kʰʏd̥l̥］，Narvík［narvikʰ］「ナルヴィク」（ノルウェーの地名）；Берков/Аурни Б. 1962: 932f.参照。

[84] Ari Páll K.（1988³：24）は合成語の第1要素が1音節の場合には，第1要素が主アクセントを担うにとどまり，後続要素には副アクセントが置かれないと述べている。Magnús P.（1992³：42 f.），Jón F.（1984²：8 f.）も同様の趣旨を述べており，半長母音ではなく，短母音として発音表記している。例．varlega［varlɛɣa］「注意深く」，samtök［samtʰök］「連結」（Ari Páll K. 1988³: 64），mistök［mɪ:stʰœǧ］「過失」，skósmiður［sǧou:smɪðʏr］「靴屋」（Jón F. 1984²: 9），Magnús P.（1992³）も本質的に同様だが，ferðamaðurinn「旅人」［ferðamaðʏrɪn］（ib. 49），［ferðama:ðʏrɪn］（ib. 50）など，一貫性を欠く。

第 1 要素 1 音節（短）＋後続要素 1 音節（短）：

Sigrún［sɪɣrun］「シグルン」(女名)[85]　Signý［sɪĝni］「シグニ」(女名)

Sigfús［sɪxfus］「シフフス」(男名)

第 1 要素 1 音節（短）＋後続要素 2 音節（長―短）：

Sigríður［sɪɣriðʏr］「シグリーズル」(女名)

第 1 要素 2 音節（長―短）＋後続要素 1 音節（長）：

Sigurlín［sɪːɣʏrliːn］「シーグルリーン」(女名)

第 1 要素 2 音節（長―短）＋後続要素 2 音節（長―短）：

Sigurliði［sɪːɣʏrlɪːðɪ］「シーグルリージ」(男名)

参考文献

＊アイスランド人の名前には基本的に「姓」がなく，通例に従って「名」の順に並べる。

Ari Páll Kristinsson. 1988[3]: *The Pronunciation of Modern Icelandic*. Reykjavík. Málvísindastofnun Háskóla Íslands.

Bandle, Oskar et al. (eds.). 2005 *The Nordic Languages*. Vol. 2. *HSK* 22.2. Berlin/New York. De Gruyter.

Берков, Валерий П./Аурни Бёдварссон. 1962. *Исландско-русский словарь*. Москва. Государственное издательство иностранных и национальных словарей.

Björn Guðfinnsson. 1964. *Um íslenzkan framburð: Mállýzkur II*. (*Studia Islandica* 23). Reykjavík. Heimspekideild Háskóla Íslands og Bókatúgáfa Menningarsjóðs.

Guðrún Kvaran/Sigurður Jónsson frá Arnarvatni. 1991. *Nöfn Íslendinga*. Reykjavík. Heimskringla/Háskólaforlag Máls og menningar.

Guðrún Kvaran. 2005. “Written Language and Forms of Speech in Icelandic in the 20th Century”. Bandle et al. (eds.). 2005. 1742–1749.

Höskuldur Þráinsson./Kristján Árnason. 1992. “Phonological Variation in 20th Century Icelandic”. *Íslenskt mál og almenn málfræði* 14. 89–128.

Indriði Gíslason/Höskuldur Þráinsson. 2000[2] (1993). *Handbók um íslenskan framburð*. Reykjavík. Rannsóknarstofnun Kennaraháskóla Íslands.

Jón Friðjónsson. 1984[2]. *Phonetics of Modern Icelandic*. Reykjavík.（発行元記載なし）

[85] si/ði は「シ」/「ジ」とカナ表記し，「スィ」/「ズィ」とはしない。

Jón Ófeigsson. 1920–24 (1980). “Træk af moderne islandsk Lydlære”. Sigfús B. (1920–24 (1980): XIV–XXVII).

Kiparsky, Paul. 1984. “On the Lexical Phonology of Icelandic”. Elert, Claes-Christian et al. (eds.). *Nordic Prosody III*. (*Studies in the Humanities* 59). Umeå/Stockholm. Acta Universitatis Umensis/Almqvist & Wiksell. 135–164.

Kreß (=Kress), Bruno. 1937. *Die Laute des modernen Isländischen*. Berlin. Schulze.

Kress, Bruno, 1938. *Phonetische Platte des Isländischen*. (*Lautbibliothek* 197). Institut für Lautforschung an der Universität Berlin. Leipzig. Harrassowitz.

Kress, Bruno. 1982. *Isländische Grammatik*. Leipzig/München. VEB Enzyklopädie/Hueber.

Kristján Árnason. 1980. *Quantity in Historical Phonology. Icelandic and Related Cases*. Cambridge et al. Cambridge University Press.

Kristján Árnason. 1998. “Vowel Shortness in Icelandic”. Kehrein, Wolfgang/Richard Wiese (eds.). *Phonology and Morphology of the Germanic Languages*. (*Linguistische Arbeiten* 86). Tübingen. Niemeyer. 3–25.

Kristján Árnason. 2005. “The Standard Languages and Their Systems in the 20th Century I: Icelandic”. Bandle et al. (eds.). 2005. 1560–1573.

Magnús Pétursson. 1978a. *Isländisch*. Hamburg. Buske.

Magnús Pétursson. 1981. “Íslenzkur framburður í japanskri hljóðritun”. Guðrún Kvaran et al. (útg.). *Afmæliskveðja til Halldórs Halldórssonar 13. júlí 1981*. Reykjavík. Íslenska Málritafélagið. 182–197.

Magnús Pétursson. 1988. “Plädoyer für ein isländisches Aussprachewörterbuch”. Milosch, Tomas/Hartmut Mittelstätt (Hrsg.). 1988. *Beiträge zur nordischen Philologie*. (*Linguistische Studien. Reihe A. Arbeitsberichte* 187). 8–15.

Magnús Pétursson. 1992³ (1981). *Lehrbuch der isländischen Sprache*. Hamburg. Buske.

Morita, Sadao. 1976. “Two Views of Old Norse Pronunciation: IP or RP?”. 人文科学研究 13.43–47. (IP=Icelandic pronunciation, RP=reconstructed pronunciation)

Pétur Helgason. 1993. *On Coarticulation and Connected Speech Processes in Icelandic*. Reykjavík. Málvísindastofnun Háskóla Íslands.

Sigfús Blöndal. 1920–24(1963) (1980–81). *Íslensk-dönsk orðabók. A-L/M-Ö*. (*Viðbætir*). Reykjavík. Verslun Þórarins B. Þorláksonar.

Sigurður Jónsson/Guðvarður Már Gunnlaugsson/Höskuldur Þráinsson. (1992²). *Málfyskudæmi*. Reykjavík. Málvísindastofnun Háskóla Íslands.

Stefán Einarsson. 1949²(1945). *Icelandic. Grammar, Texts, Glossary*. Baltimore/London. The John Hopkins U. P.

Svavar Sigmundsson. 2005. “Trends in the Linguistic Development Since 1945. IV:

Icelandic". Bandle et al. (eds.). 2005. 1832–1839.
Sveinn Bergsveinsson. 1941. *Grundfragen der isländischen Satzphonetik*. Kopenhagen/Berlin. Munksgaard/Metten.
Svein (=Sveinn) Bergsveinsson. 1967. *Isländisch-deutsches Wörterbuch*. Leipzig. VEB Verlag Enzyklopädie.
Sveinbjörn Sveinbjörnsson. 1933. *Icelandic Phonetics*. (*Acta Jutlandica* V. *Supplementum*). Universitetsforlaget i Aarhus. København. Reitzel.
Örn Sigurðsson et al. 2000. *Kortabók*. Reykjavík. Mál og menning.

浅井辰郎/森田貞雄　1980.『アイスランド地名小辞典』帝国書院
亀井孝/河野六郎/千野栄一（編）1996.『言語学大辞典第 6 巻術語編』三省堂
清水　誠　1997.「ゲルマン語類型論から見た西フリジア語の『割れ』（Brechung）と『短母音化』について」『ドイツ文学 99 号』（日本独文学会）17–27.
清水　誠　1999.「アイスランド語」千野栄一/石井米雄（編）『世界のことば 100 語辞典ヨーロッパ編』（担当部分）三省堂
清水　誠　2004a.「アイスランド語」千野栄一/石井米雄（編）『世界のことば・出会いの表現辞典』（担当部分）三省堂
清水　誠　2008.「アイスランド語」石井米雄（編）『世界のことば•辞書の辞典　ヨーロッパ編』三省堂. 360–376.
清水　誠　2009a.「アイスランド語研究と辞書編集の歴史」『日本アイスランド学会会報第 28 号』1–34.
清水　誠　2009b/c/d.「北欧アイスランド文学の歴史　(1)/(2)/(3)」『北海道大学文学研究科紀要 128/129/130』139–194/1–62/69–124.
清水　誠　2009e.『北欧アイスランド文学の歩み―白夜と氷河の国の六世紀』現代図書
森田貞雄 1981.『アイスランド語文法』大学書林